

満足度・生活の質に関する調査報告書 2025

～我が国の Well-being の動向～

令和 7 年 9 月

内閣府 政策統括官（経済社会システム担当）

目次

はじめに	2
第1章 満足度・生活の質の動向	3
1. 総合的な生活満足度の推移	3
2. 生活満足度の回答分布	6
3. 分野別満足度の動向	8
4. 過去、現在、未来の生活満足度	13
第2章 人生の充実感（エウダイモニア）や主観的な社会との信頼関係に関する指標	16
1. 各指標の特徴、指標間の関係性について	17
2. 各指標の属性別比較	22
第3章 共働き世帯の生活満足度	27
第4章 社会とのつながりと満足度	33
1. 「交友関係やコミュニティなど社会とのつながり」満足度の動向	33
2. 人との交流と社会とのつながり満足度の動向	35
3. ボランティア活動や地域コミュニティ活動と社会とのつながり満足度	39
4. SNSでの交流と社会とのつながり満足度の動向	40
5. サードプレイスと社会とのつながり満足度	41
おわりに	48
補論	50
1. 調査の概要・設計	50
2. 今回調査における設問の変更点の整理	53
3. 主観的満足度とダッシュボードと活用の可能性	54
4. 社会とのつながりに関する追加分析	56
参考文献	58

はじめに

内閣府では我が国の経済社会の構造を人々の満足度（Well-being）の観点から多面的に把握する取組として、「満足度・生活の質に関する調査」を実施してきた。

過去の研究や同様の取組も参考に進めた研究の結果、生活の幅広い範囲について包括的に評価できる体系として、総合的な主観満足度の他、分野別の満足度とそれに関連する意識や指標を問う調査形式を構築している。

これまでの調査報告書においては、各年の調査結果について時世やデータの特徴的な動きをまとめるとともに、指標の整備拡充に向け、様々な分析を行ってきた。

今回の報告書においても、生活満足度の動向について、性別や年齢階層別、地域別といった属性ごとの違い、分野別の生活満足度の動向を含めて包括的に確認している。また、「エウダイモニア」や「主観的な社会との信頼関係」などに関連する質問を追加し、生活評価としての満足度との比較等を行った。次に、本人に加えて配偶者の就業状況についても質問を追加し、共働き世帯の満足度の分析を行った。そのほか、日常生活を送る上での家庭や職場・学校以外の第三の居場所（サードプレイス）に関連した質問も追加し、人の時間の過ごし方をより多面的にとらえようと試みている。

第1章 満足度・生活の質の動向

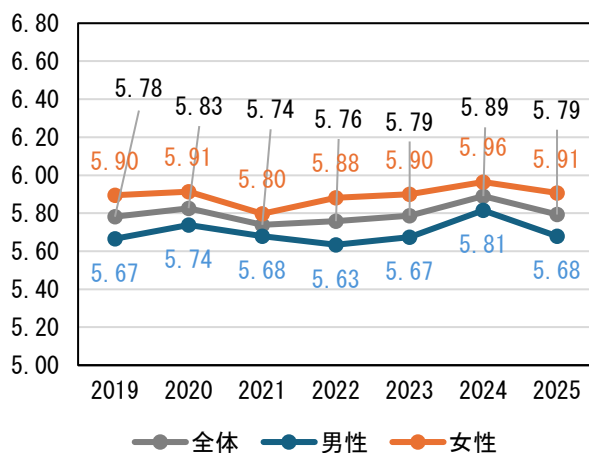
内閣府では、これまで6回にわたって、客観的指標と紐づける分野別満足度やこれに関する意識など幅広い情報を集める調査を実施してきた。主観的 Well-being の代表的な指標として、生活満足度を計測しているが、これは、現在の生活にどの程度満足しているかを0～10点で自己評価するものである。本章ではまず、生活満足度の動向について、時系列変化を確認する。

1. 総合的な生活満足度の推移

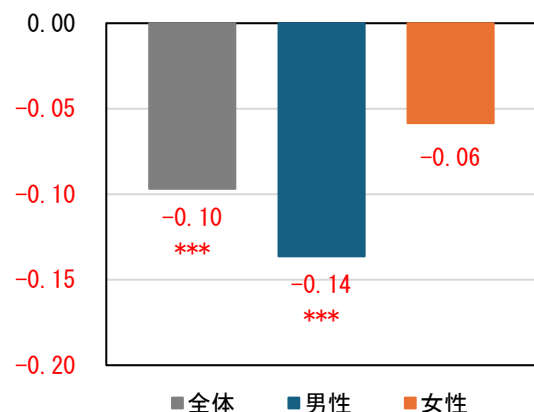
総合的な生活満足度（以下「生活満足度」）は、全体の平均が5.79と一進一退の動きの中で、前回調査（2024年2月）の5.89から0.10ポイント低下し、前々回調査（2023年2月）と同水準となった。男女別にみると、男性は昨年より0.14ポイント低下、女性は0.06ポイント低下しており、男性の方では統計上有意な差が認められた¹。なお、これまでの調査と同様、男性よりも女性の方が水準は高い。

図1-1 生活満足度の推移と前回調査からの変化（男女別）

（1）推移



（2）前回調査からの変化



（備考）***は1%で有意

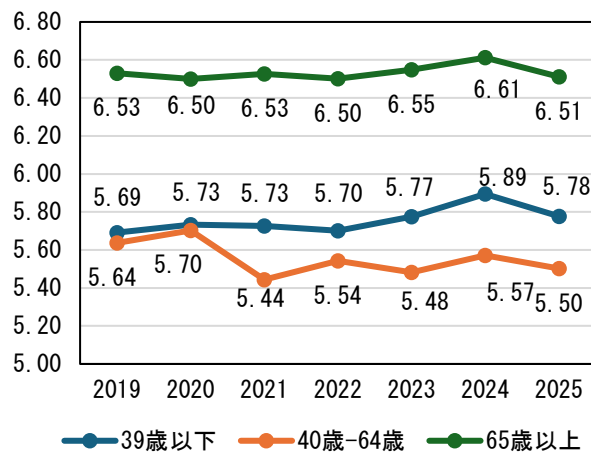
（年齢階層別の生活満足度の変化）

年齢階層別に若年層（39歳以下）、ミドル層（40歳-64歳）、高齢層（65歳以上）について生活満足度をみると、その水準は、高齢層で高く、ミドル層で低い傾向がある。今回調査では、前回調査からすべての年齢階層で低下しており、若年層で統計上有意な差が認められている。若年層では0.12ポイント、ミドル層では0.07ポイント、高齢層では0.10ポイント、それぞれ低下した。

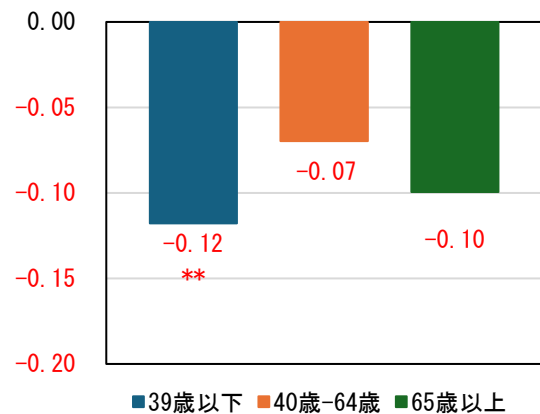
¹ 本報告における統計的有意性の検定は、一部でも新規サンプルが含まれている場合は、「対応のないデータ」とみなして検定を行った。

図 1－2 生活満足度の推移と前回調査からの変化（年齢階層別）

（１）推移



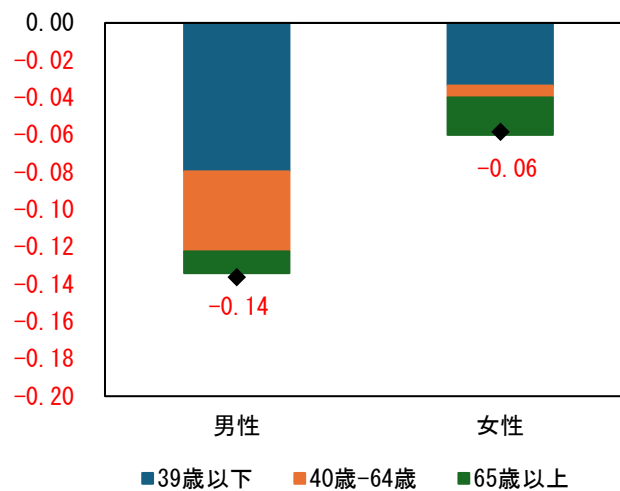
（２）前回調査からの変化



（備考）**は 5%で有意

男女別でみた全体の変化に年齢階層別の変化がどの程度寄与したのかをみると、男性、女性ともに若年層の寄与が大きいことがわかる。

図表 1－3 男女別・年齢階層別の生活満足度変化の寄与



（地域別の生活満足度の変化）

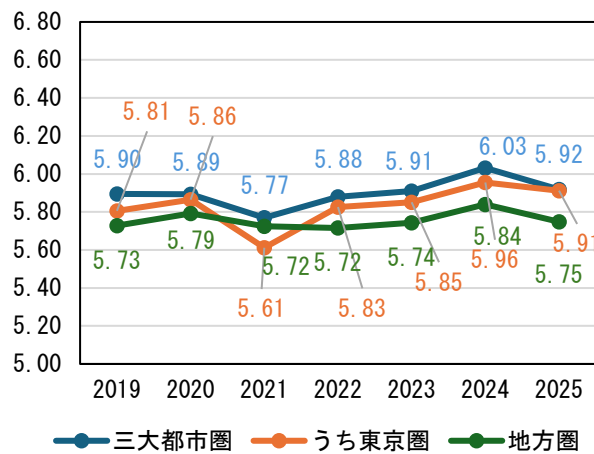
地域別の満足度の動向をみると、前回調査から三大都市圏²、東京圏、地方圏³の全てにおいて低下し、そのうち三大都市圏、地方圏では統計上有意な差が認められた。

² 東京圏（東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県）、名古屋圏（愛知県・三重県・岐阜県）、大阪圏（大阪府・京都府・兵庫県・奈良県）を指す。

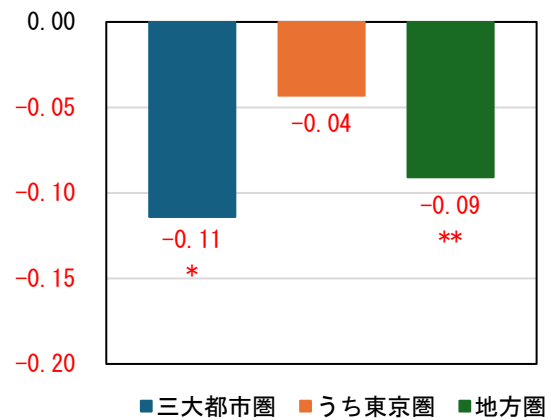
³ 三大都市圏を除く道県を指す。

図表 1－4 生活満足度の推移と前回調査からの変化（地域別）

（１）推移



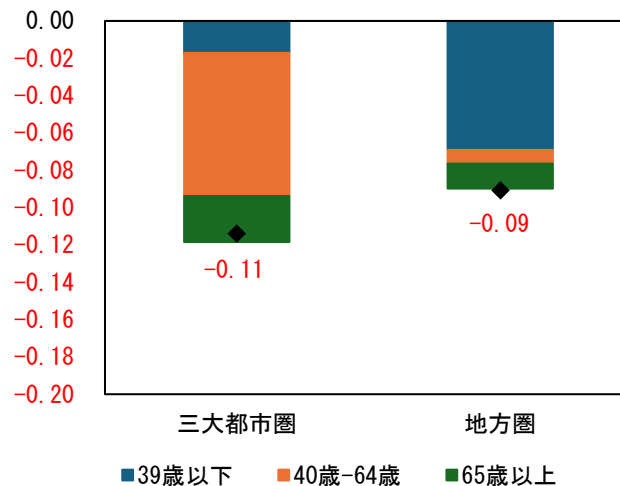
（２）前回調査からの変化



（備考）**、*はそれぞれ 5%、10%で有意

地域別でみた全体の変化に年齢階層別の変化がどの程度寄与したのかをみると、三大都市圏ではミドル層が、地方圏では若年層が全体の生活満足度低下に大きく寄与したことがわかる。

図表 1－5 地域別・年齢階層別の生活満足度変化の寄与

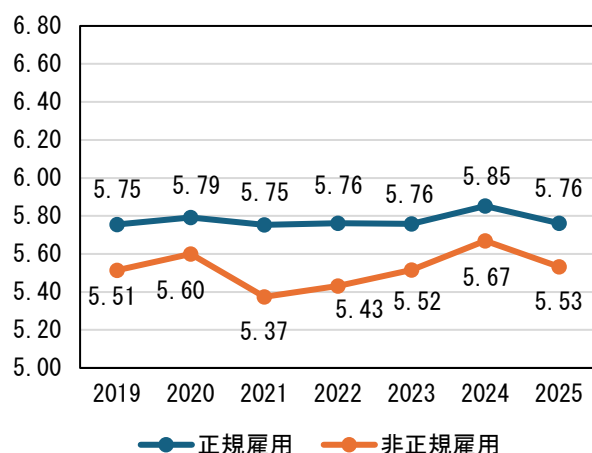


（雇用形態別の生活満足度の変化）

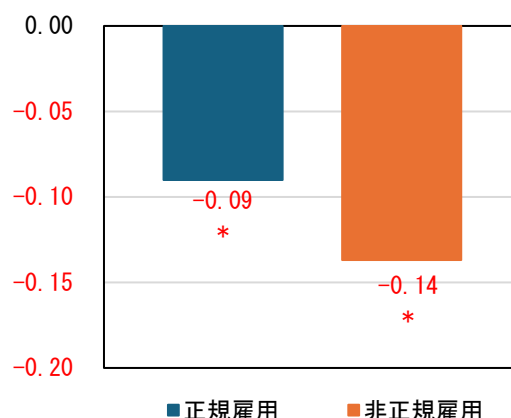
就業者の満足度の動向を雇用形態別にみると、正規雇用は前回調査から 0.09 ポイント、非正規雇用は 0.14 ポイントそれぞれ低下した。正規雇用、非正規雇用ともに統計上有意な差が認められた。

図表 1－6 生活満足度の推移と前回調査からの変化（雇用形態別）

（１）推移



（２）前回調査からの変化



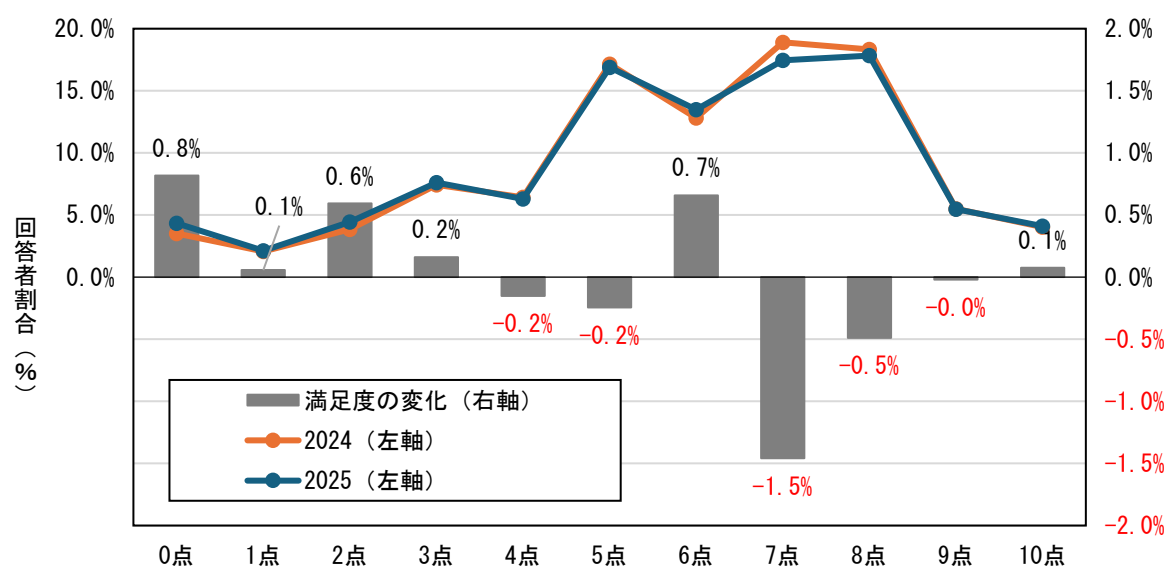
(備考)*は 10%で有意

2. 生活満足度の回答分布

（生活満足度の点数分布）

生活満足度の点数別の分布をみると、最頻値は 8 点 (17.8%)、ついで 7 点 (17.4%)、5 点 (16.9%) となり、全体の約 66%が 5～8 点に集中している。過去 6 回の調査の分布と比べて、分布の形状は大きくは変わらない。

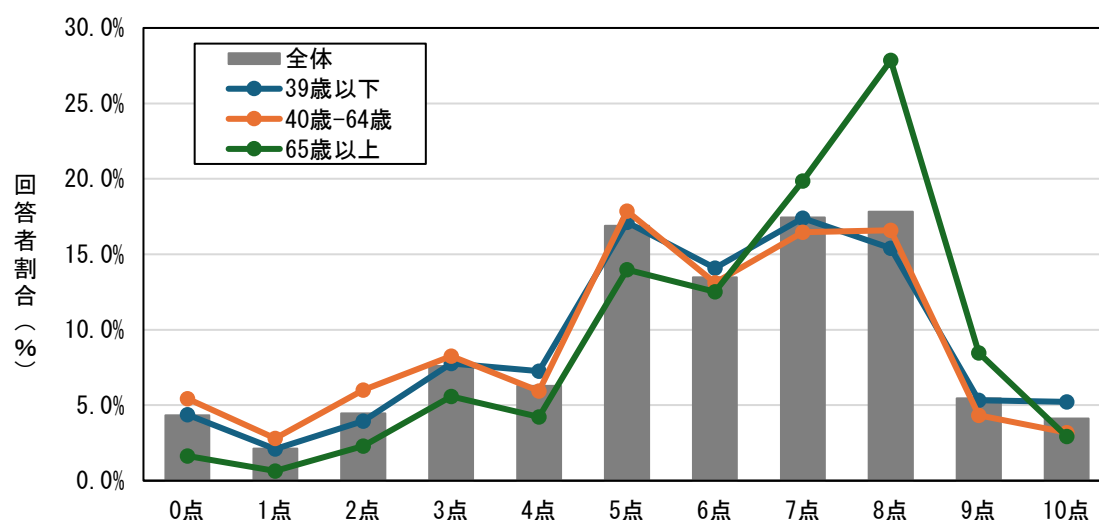
図表 1－7 生活満足度の点数別の分布（回答者割合）と 1 年間の変化



（年齢階層別の生活満足度の点数分布）

生活満足度の点数別の分布を年齢階層別に分けてみると、高齢層の最頻値は8点（27.8%）、ついで7点（19.9%）となり、ミドル層の最頻値は5点（17.9%）、ついで8点（16.6%）、若年層の最頻値は7点（17.4%）、ついで5点（17.1%）となる。

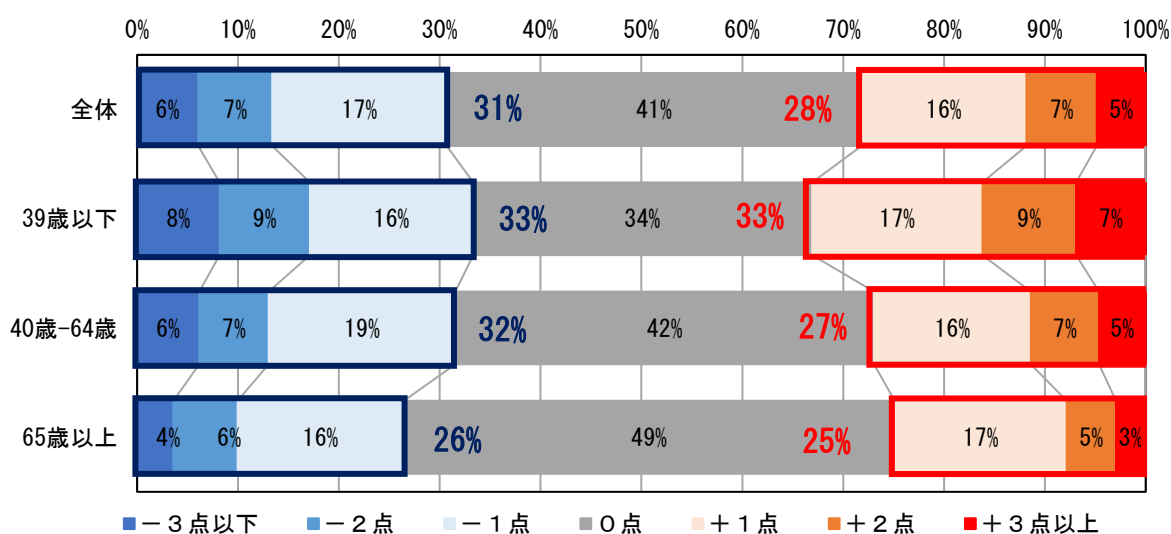
図表 1－8 生活満足度の点数別の分布（年齢階層別）



（継続回答者の生活満足度変化）

本年調査のサンプルの一部（4,029人）は、前回調査に引き続いての回答者である。生活満足度の水準の変化は全体サンプルと同様の傾向であるものの、この継続サンプルに限って個人の生活満足度の変化をみることができる。これによると、およそ3割程度の人の満足度がそれぞれ上昇または低下しているが、その中で、上昇した割合が低下した割合を2.5%ポイント下回った。さらに年齢階層別にみると、すべての年齢階層で満足度が上昇した割合の方が低下した割合を下回った。

図表 1－9 生活満足度の増減割合【継続サンプル】



3. 分野別満足度の動向

本調査では、生活全体について問う生活満足度とともに、13の分野について満足度を尋ねており⁴、ここではその動向を確認する。

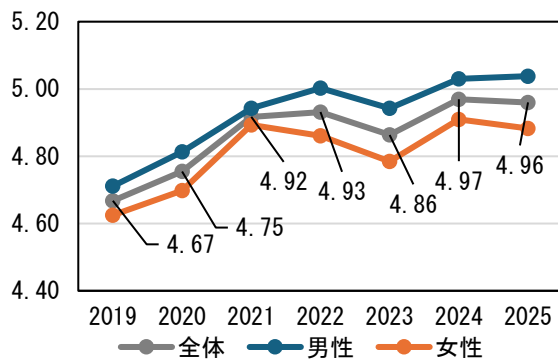
（分野別満足度の変化）

分野別満足度について、前回調査からの動きに着目すると、「雇用環境と賃金」、「仕事と生活（WLB）」、「自然環境」の分野で上昇したものの、「健康状態」、「自身の教育水準・教育環境」、「社会とのつながり」、「子育てのしやすさ」等で低下した。男女別に動きをみても、ほとんどの分野別満足度において、同様の動きとなった。

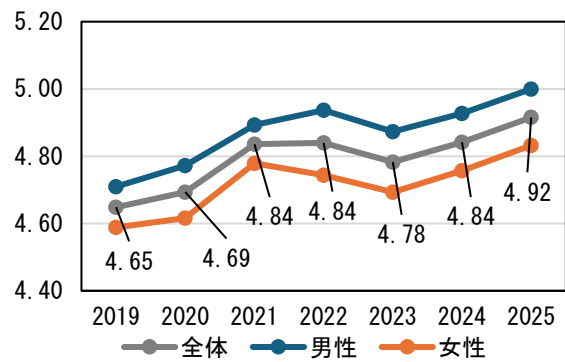
⁴ 各分野別満足度については補論3. を参照。

図表 1－10 分野別満足度の推移

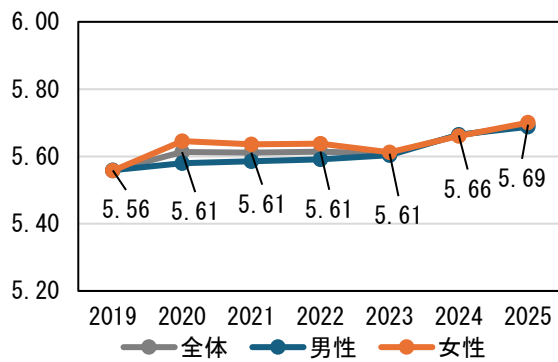
(1) 家計と資産



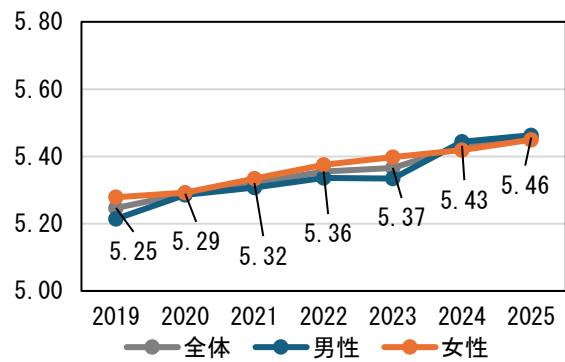
(2) 雇用環境と賃金



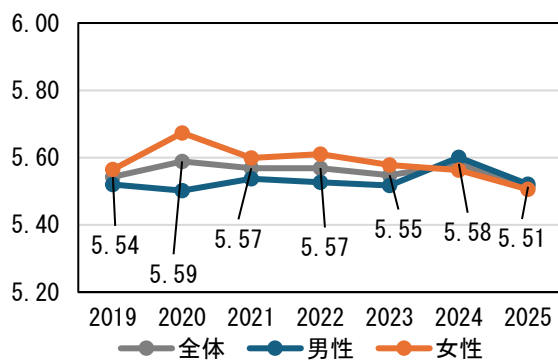
(3) 住宅



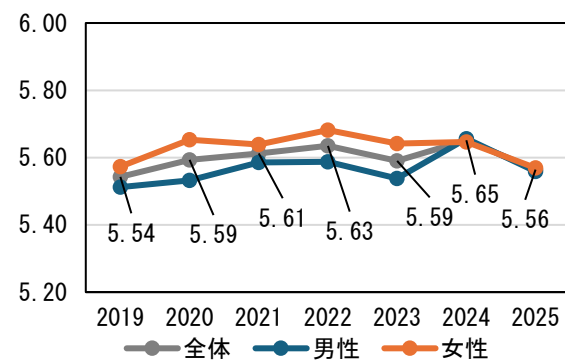
(4) 仕事と生活 (WLB)



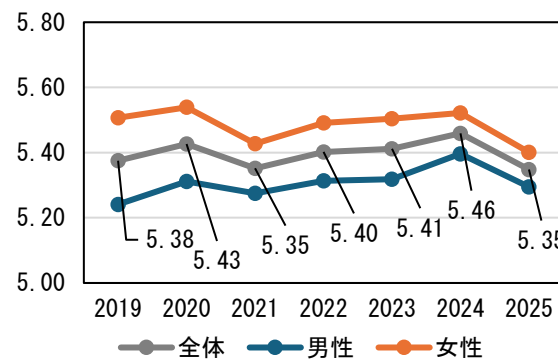
(5) 健康状態



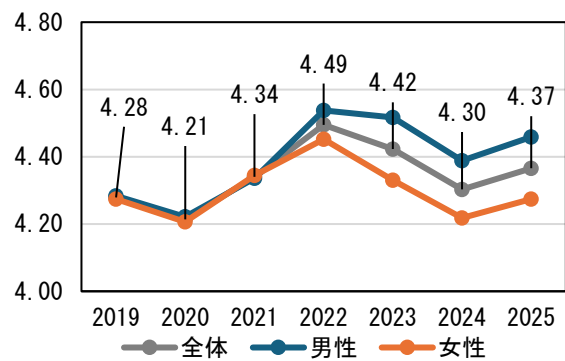
(6) 自身の教育水準・教育環境



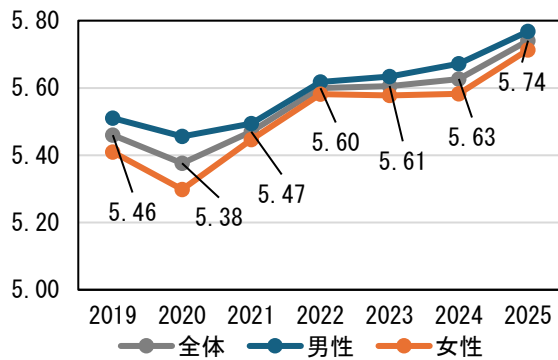
(7) 社会とのつながり



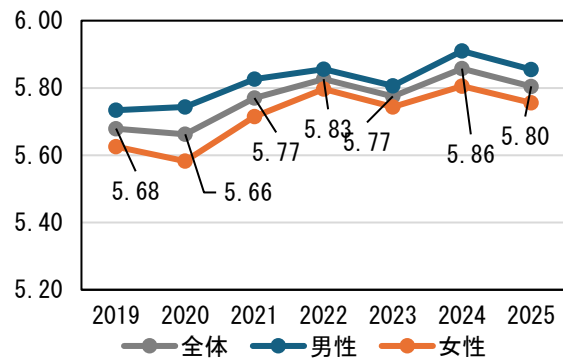
(8) 政治・行政・裁判所への信頼性



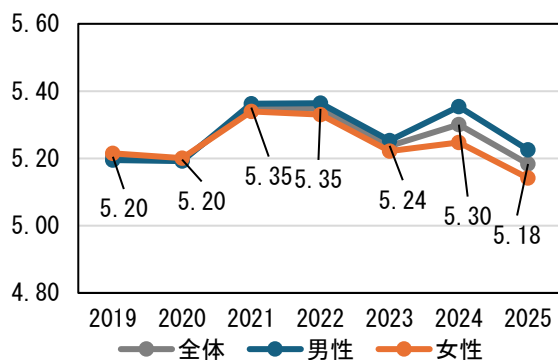
(9) 自然環境



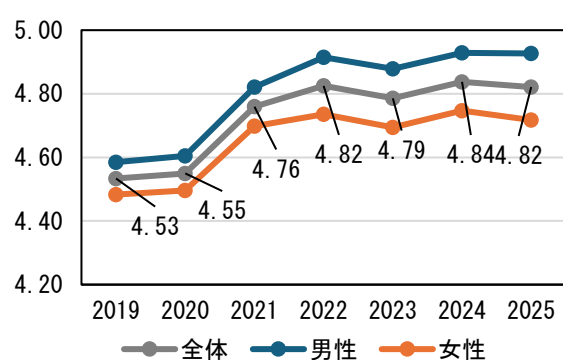
(10) 身の回りの安全



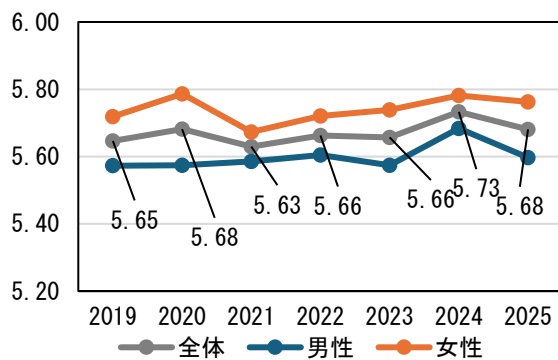
(11) 子育てのしやすさ



(12) 介護のしやすさ・されやすさ



(13) 生活の楽しさ・面白さ



(分野別満足度と生活満足度の関係)

各分野別満足度と生活満足度との関係を確認する。図表1-11に、生活満足度を13の分野別満足度で重回帰分析した結果を示した⁵。全サンプルを対象にしたモデル(モデル1)においては、最も回帰係数が大きいのは、「生活の楽しさ・面白さ」であり、次いで「家計と資産」、「住宅」、「健康状態」となった。男性のみのサン

⁵ 各分野別満足度間の相関係数をみると、ほとんどの組み合わせで0.5以上であり、「家計と資産」と「雇用環境と賃金」のように0.7以上の組み合わせも存在する。説明変数間には一定程度の相関があり、多重共線性の懸念があることから、VIF (Variance inflation factor: 分散拡大要因)を確認した。図表1-11に示すいずれのモデルにおいても、すべての説明変数のVIFが5以下の値となり、多重共線性による深刻な問題は起こっていないことを確認した。

ルを対象にしたモデル（モデル2）と女性のみのサンプルを対象にしたモデル（モデル3）では「教育水準・教育環境」や「生活を取り巻く空気や水などの自然環境」については有意性に男女差が見られたが、そのほかの変数の有意性の傾向についてはモデル1と同様であった。性別と年齢をコントロールしたモデル（モデル4）においても、変数の傾向はモデル1と変わらなかった。

図表1-11 分野別満足度と生活満足度の関係

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4
被説明変数：生活満足度	全体	男性	女性	全体
家計と資産	0.244 ***	0.234 ***	0.257 ***	0.243 ***
雇用環境と賃金	0.057 ***	0.101 ***	0.026 *	0.064 ***
住宅	0.104 ***	0.100 ***	0.102 ***	0.099 ***
仕事と生活（ワークライフバランス）	0.086 ***	0.109 ***	0.069 ***	0.084 ***
健康状態	0.099 ***	0.077 ***	0.115 ***	0.104 ***
教育水準・教育環境	0.043 ***	0.071 ***	0.015	0.038 ***
交友関係やコミュニティなど社会とのつながり	0.053 ***	0.056 ***	0.046 ***	0.051 ***
政治・行政・裁判所への信頼性	-0.032 ***	-0.039 ***	-0.023 **	-0.030 ***
生活を取り巻く空気や水などの自然環境	-0.030 ***	-0.009	-0.044 ***	-0.029 ***
身の周りの安全	0.015	0.016	0.020	0.014
子育てのしやすさ	-0.001	0.006	-0.008	-0.002
介護のしやすさ・されやすさ	-0.049 ***	-0.058 ***	-0.041 ***	-0.042 ***
生活の楽しさ・面白さ	0.399 ***	0.351 ***	0.426 ***	0.391 ***
女性ダミー				0.193 ***
若年ダミー（15-39歳）				-0.035
高齢ダミー（65歳以上）				0.195 ***
定数項	0.371 ***	0.124 *	0.624 ***	0.283 ***
修正済み決定係数	0.670	0.686	0.656	0.672
サンプルサイズ	10,633	5,281	5,352	10,633

（備考）***、**、*はそれぞれ1%、5%、10%で有意

満足度の値として、計測されたままの標準化していないもの（最小値0点、最大値10点）を用いた。

（男女別・年齢階層別の分野別満足度の変化）

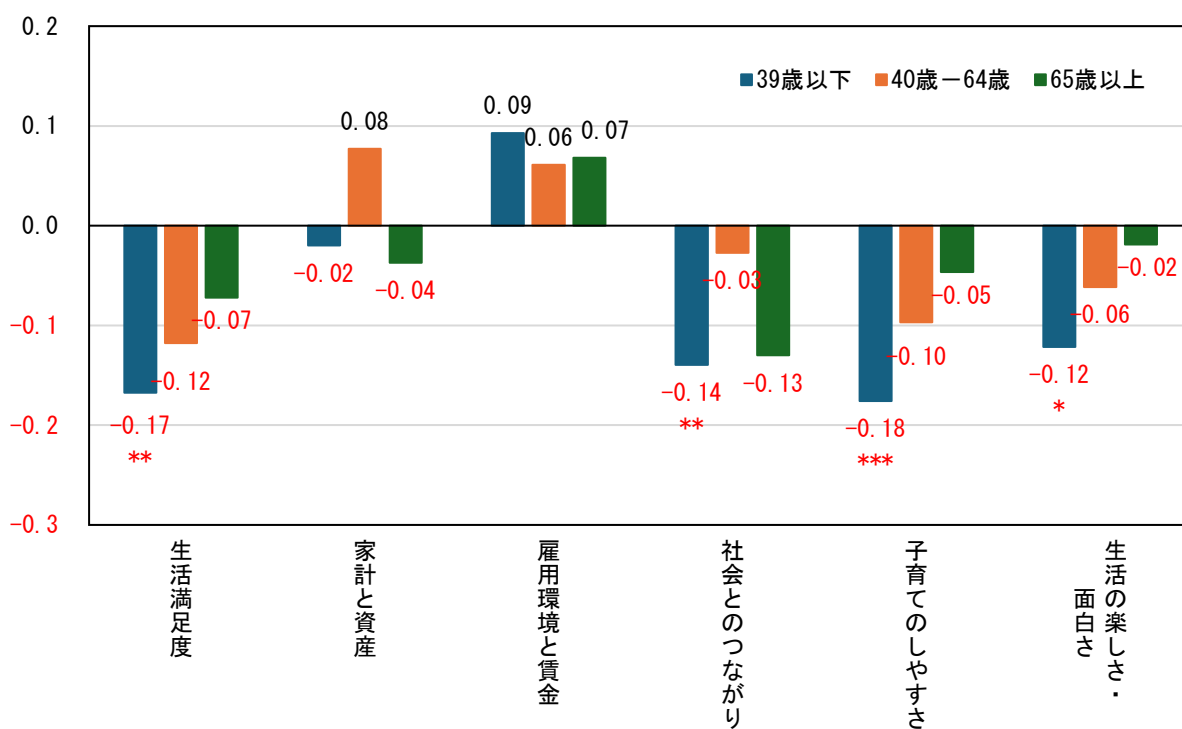
図表1-11において回帰係数が比較的大きい分野などについて、男女別かつ年齢階層別に、その変化を確認する。

まず、生活満足度について、男性・女性ともに若年層、ミドル層、高齢層いずれも低下しており、男性では若年層で統計上有意に低下した。

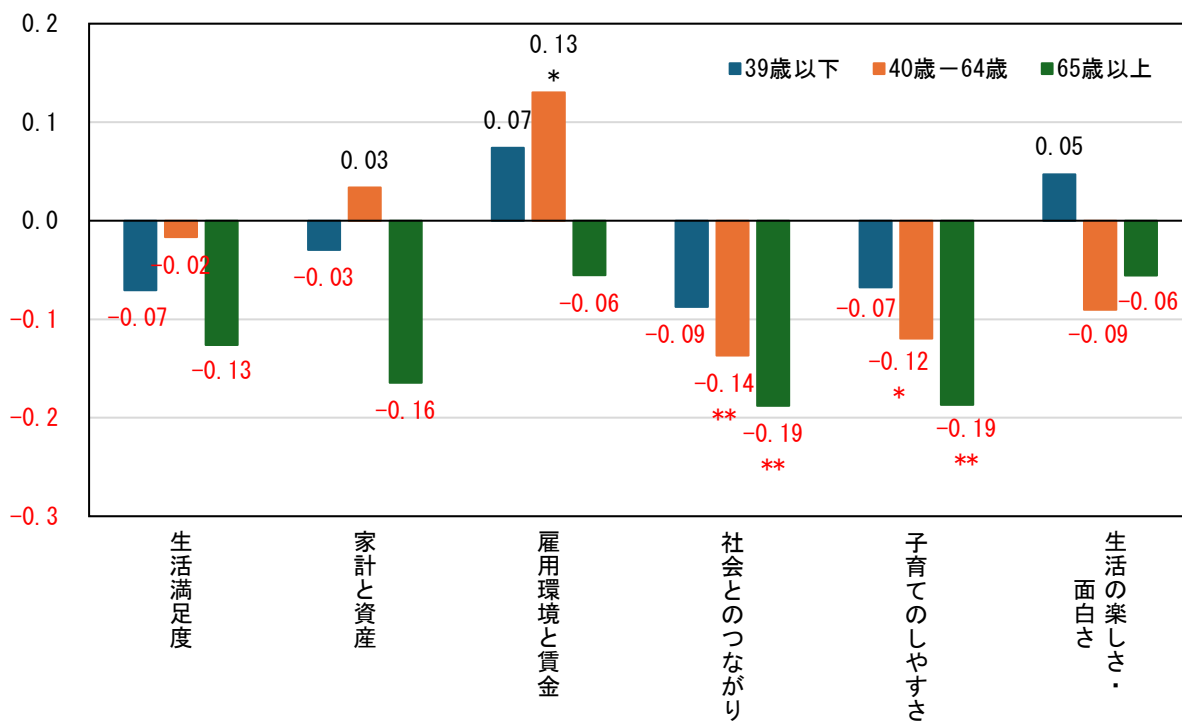
各分野については、男性はすべての年齢階層で、女性は若年層、ミドル層で「雇用環境と賃金」が上昇した。一方で、「社会とのつながり」や「子育てのしやすさ」は、すべての年齢階層で低下した。

図表 1-12 分野別満足度の変化（男女別・年齢階層別）

（１）男性



（２）女性



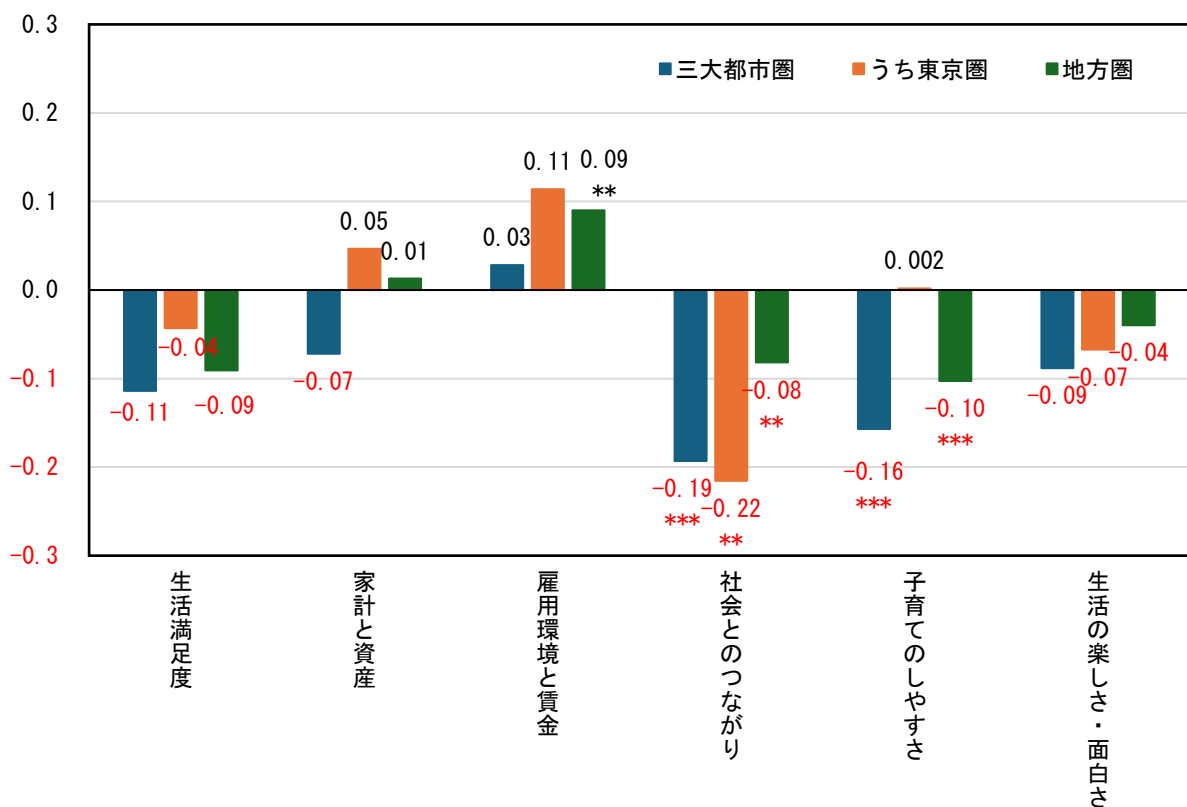
（備考）***、**、*はそれぞれ 1%、5%、10%で有意

（地域別の分野別満足度の変化）

地域別に確認すると、生活満足度については、東京圏、三大都市圏、地方圏いずれも低下した。

各分野についてみると、「雇用環境と賃金」は、いずれも上昇しており、地方圏では有意に上昇した。一方で、「社会とのつながり」や「生活の楽しさ・面白さ」では、いずれも低下しており、「社会とのつながり」については、東京圏、三大都市圏、地方圏のいずれも有意に低下した。

図表 1－13 分野別満足度の変化（地域別）



（備考）***、**はそれぞれ 1%、5%で有意

4. 過去、現在、未来の生活満足度

本調査では、現在を起点として、5年前を回顧した生活満足度（以下、5年前回顧満足度）と、5年後を予想した生活満足度（以下、5年後予想満足度）について尋ねており⁶、ここではその動向を確認する。

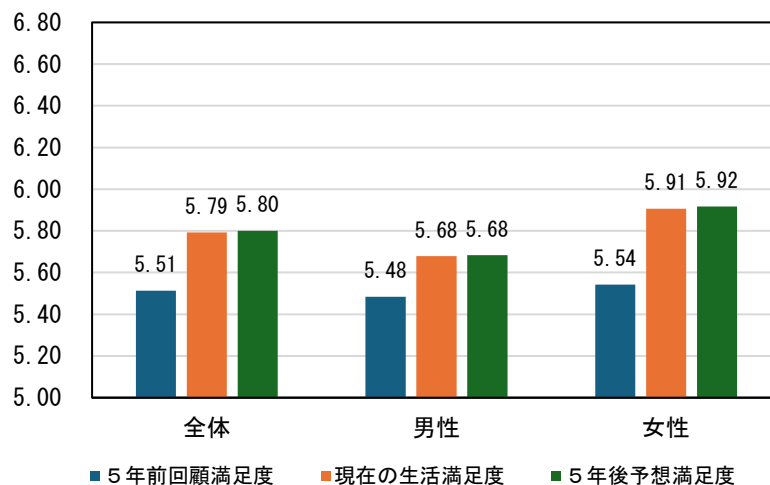
⁶ 5年前回顧満足度及び5年後予想満足度は、前回調査から新たに追加した設問だが、内閣府（2024）にて設問順が回答結果に影響を与えた可能性が指摘されていたため、前回と今回では設問の位置を変更した。前回調査では、冒頭に現在の生活満足度を尋ね、各分野別の満足度や将来不安等について質問した後に、5年前回顧満足度及び5年後予想満足度を尋ねたが、今回は、現在の生活満足度を尋ねた直後に、5年前回顧満足度及び5年後予想満足度を尋ねた。

（５年前回顧満足度と５年後予想満足度の全体的な傾向）

現在の生活満足度と、５年前回顧満足度、５年後予想満足度を全体サンプルで比較したところ、５年前回顧満足度と比べて現在の生活満足度は高くなる傾向がみられた。また、現在の生活満足度と５年後予想満足度は同程度となった。

男女別にみても、こうした傾向は変わらなかったが、現在の生活満足度・５年後予想満足度と５年前回顧満足度との差は、男性に比べて女性の方が大きい傾向が見られた。

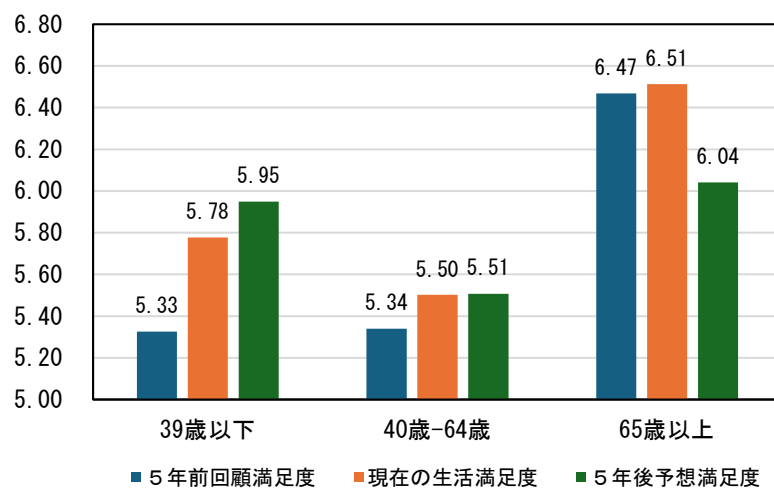
図表１－１４ 男女別の５年前回顧満足度と５年後予想満足度の傾向



（年齢階層別の５年前回顧満足度と５年後予想満足度の傾向）

次に年齢階層別に見たところ、年齢階層で傾向が大きく異なる結果となった。まず、若年層について見ると、５年前回顧満足度、現在の生活満足度、５年後予想満足度と、順を追ってスコアが高くなっていく傾向となっている。ミドル層について見ると、５年前回顧満足度と比べて、現在の生活満足度の方が高く、５年後予想満足度は現在の生活満足度と同程度となった。高齢層について見ると、他の世代よりも高水準の中で、５年前回顧満足度と現在の生活満足度が同程度となり、５年後予想満足度はそれらより低い傾向となった。こうした結果から、過去・現在・未来の満足度の捉え方に関しては、世代間で大きく異なることが示唆された。

図表 1－15 年齢階層別の 5 年前回顧満足度と 5 年後予想満足度の傾向



第2章 人生の充実感（エウダイモニア）や主観的な社会との信頼関係に関する指標

主観的 Well-being に関する中核的尺度として、2013 年に OECD が公表したガイドラインでは、①生活評価、②感情経験、③エウダイモニアが挙げられている⁷。このうち、②感情経験や③エウダイモニアについては、これまでも本調査に取り入れるべきかどうかは検討をしつつも、個人の内面にも深く関わるものであり、政府の立場でこれらの尺度を扱うことに対して慎重であるべきとの考え方もあった。そのため、これまでの満足度・生活の質に関する調査では、上記を直ちに取り入れることは避け、心の健康状態を測る指標である「K6⁸」や「仕事のやりがい」の有無、「生きがい」の有無など、主観指標ではあるが相対的にある程度の客観的視点も確保されると考えられる設問を設けるにとどめ、これらと生活満足度の関係を分析することなどを中心に進めてきた。

一方で、調査を重ねていく中で、分野別満足度の「生活の面白さ・楽しさ」や、「仕事のやりがい」の有無といったエウダイモニアに近いと思われる要素について、様々な分析から生活満足度にも関連することが分かってきた。また、重回帰分析により 13 の分野別満足度を用いて総合生活満足度の説明を試みた結果、7 割弱が説明できるとの結果が示されている⁹。残る 3 割程度については、その他の要因として、主に個人的な要因が考えられ、この部分にエウダイモニアに関する要素も含まれている可能性がある。加えて、他者や社会との関わり方に関しても、Well-being に影響を及ぼす重要な要素として近年注目されてきている。

一人一人の Well-being 向上を目指していく上では、今後は、こうした側面についても、上述した点には十分留意をしつつ、一定の把握もしていくことが政策上の意義を持つと考えられる。例えば、「働きがい」を持って仕事に取り組んでいるかどうか、人々の心の健康や生産性などに影響している可能性も考えられる。

以上のような背景を踏まえ、今回の調査では、従来の生活満足度といった主観指標に加え、「エウダイモニア」や「主観的な社会との信頼関係」などの主観指標にも着目して、質問を試行的に設定した。本章では、ここから得られる各指標と生活満足度との関係、指標間の関係性、属性別の比較などに注目して分析を行い、より包括的な Well-being の理解を目指した。

⁷ 生活評価は「ある人の生活またはその特定側面に対する自己評価」、感情経験は「ある人の気持ちまたは情動状態、通常は特定の一時点を基準にして測る」、エウダイモニア (eudaimonia) は、「人生における意義と目的意識、または良好な精神的機能」とされている。OECD の主観的 Well-being ガイドラインと満足度・生活の質に関する調査との関係については、横山、有野、門野(2024)を参照。

⁸ K6 とは、うつ病・不安障害などの精神疾患をスクリーニングすることを目的として開発された心の健康状態を測る指標のひとつ。詳細は脚注 23 を参照。

⁹ 総合生活満足度と分野別満足度の関係については、内閣府(2020b)の補論を参照。

（新規に追加した設問）

新規に追加した設問内容は以下のとおり。

（問）あなたの普段の気持ちについてお伺いします。「全くあてはまらない」を 0 点、「非常にあてはまる」を 10 点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかひとつだけ選んでください。

- ① 自分は充実した人生を送れていると思う。
- ② 周囲の人々に認められていると感じる。
- ③ 自分は周囲の人々や社会の役に立っていると思う。
- ④ 周囲の人と違うことを言ったりしたりしても、受け止めてもらえると感じている。
- ⑤ 自分の人生が様々な人々に支えられていると感じる。

なお、以下では、それぞれ①「充実した人生を送れている」、②「人々に認められている」、③「人々や社会の役に立っている」、④「人と違うことを言っても受け止めてもらえる」、⑤「人々に支えられている」と表記する。

各設問について、①は「エウダイモニア」に関連する主観指標として設定している。また、②～⑤の 4 つの指標については「主観的な社会との信頼関係」に関連する主観指標として設定している。後者に関しては、周囲の人々や社会と自身の関わりについて多角的に評価するために複数の指標を設定した。

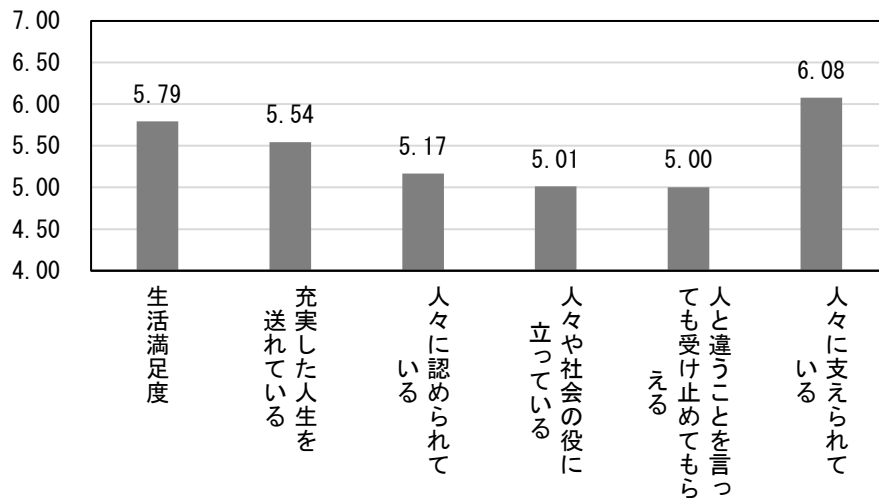
まず、5 つの指標の特徴、指標間の関係性をみる。

1. 各指標の特徴、指標間の関係性について

（平均スコアの比較）

各指標の全サンプル平均スコアを「生活満足度」と比較したところ、「充実した人生を送れている」「人々に認められている」「人々や社会の役に立っている」「人と違うことを言っても受け止めてもらえる」の 4 つは、「生活満足度」よりも低い数値となる一方、「人々に支えられている」は、「生活満足度」よりも高いスコアを示した。

図表 2－1 各指標の平均スコア



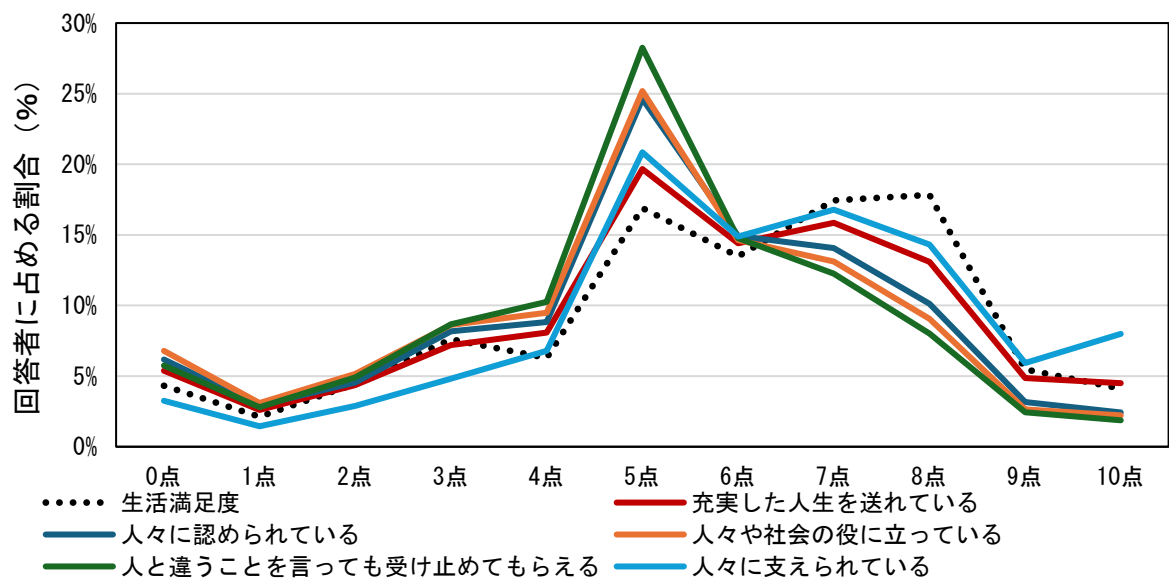
(各指標の回答分布)

各指標の回答分布をみると、生活満足度については、最頻値が8点だったが、今回新しく調査した5つの項目の点数分布は、いずれも最頻値が5点となった。

また、生活満足度は二山型となるが、「人々に認められている」、「人々や社会の役に立っている」、「人と違うことを言っても受け止めてもらえる」は、最頻値の5点の密度が高い一山型であり、平均点も他の指標と比べて低い。

また、「充実した人生を送れている」、「人々に支えられている」は最頻値の5点のほか7点にもピークが出るが、前者は生活満足度の回答分布に比較的近く、後者は、0点～3点の低スコアの回答が少なく、10点の回答が多い傾向が見られる。

図表 2－2 各指標の回答分布



（指標間の相関関係）

今回追加した5つの指標について、5つの指標間と「生活満足度」、「社会とのつながり満足度」との相関を確認する。

まず、今回追加した5つの指標間では、それぞれ正の相関が見られた。5つの指標間それぞれの関係に着目すると、「人々に認められている」、「人々や社会の役に立っている」、「人と違うことを言っても受け止めてもらえる」に関しては、3項目間における相関係数の値は比較的高い傾向が見られた（ $r = 0.78 \sim 0.84$ ）。一方で、「人々に支えられている」の項目は、他のいずれの指標とも相関係数が相対的に低く（ $r = 0.59 \sim 0.65$ ）、他の指標とは異なる傾向が示唆された。

「生活満足度」と5つの指標との関係に着目すると、「充実した人生を送れている」との間に最も高い相関があった（ $r = 0.79$ ）。先行研究をみると、OECD(2013)¹⁰では、「生活満足度」と「エウダイモニア的幸福（人生の目的）」の相関は0.13程度と低く、それぞれの指標は異なる主観の状況を捉えるものとされる。一方、河野・西原（2025）¹¹、Sethら（2021）¹²などの近年の報告によると、「生活満足度」と「エウダイモニア」の間には高い相関があるとされている。本調査の結果は後者と整合的だった。また、「生活満足度」と「人々に支えられている」の相関係数は、他の指標と比べて低かった（ $r = 0.58$ ）。

「社会とのつながり満足度」と5つの指標には正の相関が見られ（ $r = 0.59 \sim 0.68$ ）、「生活満足度」と同様の傾向だった。

今回追加した5つの指標は、生活満足度の中でも、分野別満足度だけでは説明しきれない要因（内面の充実、家族や周囲との人間関係等）を含んでいると考えられる。このため、被説明変数を「生活満足度」、説明変数を13分野の「分野別満足度」として重回帰分析を実施した際の残差¹³に着目して、5つの指標との関係を確認したところ、それぞれ正の相関が見られ（ $r = 0.06 \sim 0.19$ ）、5つの指標の中では、「充実した人生を送れている」との相関が最も高かった（ $r = 0.19$ ）。こうした指標について、詳細な分析を進めていくことで、Well-beingや生活満足度についてより包括的に把握することができる可能性が示唆された。

¹⁰ OECD (2013), *OECD Guidelines on Measuring Subjective Well-being*, OECD Publishing, Paris.

¹¹ 河野陽介, 西原照雅 (2025) 「主観的 Well-being の多面的評価と規定要因の解明—主観的 well-being の政策活用に向けて—」, ESRI Research Note No. 90

¹² Seth Margolis, Eric Schwitzgebel, Daniel J. Ozer, and Sonja Lyubomirsky, “Empirical Relationships Among Five Types of Well-Being,” in *Measuring Well-Being*, ed. Matthew T. Lee, Laura D. Kubzansky, and Tyler J. VanderWeele (Oxford: Oxford University Press, 2021), pp. 377-403.

¹³ 図表 1-11 のモデル 4 の残差を用いた。

図表 2－3 各指標間の相関係数

	充実した人生を送れている*	人々に認められている*	人々や社会の役に立っている*	人と違うことを言っても受け止めてもらえる*	人々に支えられている*	生活満足度	「社会とのつながり」満足度	生活満足度を13の分野別満足度で重回帰した際の残差
充実した人生を送れている*	1.00							
人々に認められている*	0.78	1.00						
人々や社会の役に立っている*	0.73	0.84	1.00					
人と違うことを言っても受け止めてもらえる*	0.70	0.79	0.78	1.00				
人々に支えられている*	0.65	0.63	0.59	0.62	1.00			
生活満足度	0.79	0.66	0.62	0.60	0.58	1.00		
「社会とのつながり」満足度	0.68	0.67	0.64	0.65	0.59	0.64	1.00	
生活満足度を13の分野別満足度で重回帰した際の残差	0.19	0.10	0.07	0.06	0.09	0.57	0.00	1.00

(備考) *については、今回追加した5つの指標。

(分野別満足度との関係)

続いて、5つの指標と13の分野別満足度との関係¹⁴について、重回帰分析によって確認すると、以下のような特徴がみられた。

まず、「充実した人生を送れている」は、最も回帰係数が大きいものは「13. 生活の楽しさ・面白さ」、二番目に「1. 家計と資産」となっており、「生活満足度」と比較的類似している。三番目以降は、違いがみられ「生活満足度」の項目の場合「5. 健康状態」が続くのに対して、「充実した人生を送れている」は「7. 交友関係やコミュニティなど社会とのつながり」が続いている。

次に「人々に認められている」、「人々や社会の役に立っている」、「人と違うことを言っても受け止めてもらえる」の3つは、最も回帰係数が大きいものは「7. 交友関係やコミュニティなど社会とのつながり」となっている点で「生活満足度」とは異なる。次点に、「13. 生活の楽しさ・面白さ」もしくは「6. あなたご自身の教育水準・教育環境」が続く。

「人々に支えられている」に関しては、最も回帰係数が大きいものは「13. 生活の楽しさ・面白さ」となっている。その後は、「7. 交友関係やコミュニティなど社会と

¹⁴「満足度・生活の質を表す指標群 (Well-being ダッシュボード)」は、主観指標のうち「生活満足度」に対して構築された体系であり、第1層の総合主観満足度(生活満足度)に対応する形で、第2層に分野別満足度を位置付けている。今回の分析では、第1層の総合主観満足度(生活満足度)を、追加した5つの指標で置き換える形で分析を行った。

のつながり」「6. あなたご自身の教育水準・教育環境」が続く。他方で「生活満足度」と異なり、「家計や資産」とは正の相関がみられなかった。

図2-4 各指標と分野別満足度の重回帰分析

	生活満足度	充実した人生を送れている	人々に認められている	人々や社会の役に立っている	人と違うことを言っても受け止めてもらえる	人々に支えられている
1. 家計と資産	0.243 ***	0.167 ***	0.097 ***	0.110 ***	0.073 ***	-0.037 ***
2. 雇用環境と賃金	0.064 ***	0.049 ***	0.099 ***	0.103 ***	0.075 ***	0.026 **
3. 住宅	0.099 ***	0.052 ***	0.024 **	-0.006	0.002	0.058 ***
4. 仕事と生活（ワークライフバランス）	0.084 ***	0.081 ***	0.021 *	0.026 **	0.040 ***	0.066 ***
5. 健康状態	0.104 ***	0.115 ***	0.092 ***	0.122 ***	0.085 ***	0.025 **
6. あなたご自身の教育水準・教育環境	0.038 ***	0.098 ***	0.159 ***	0.162 ***	0.113 ***	0.146 ***
7. 交友関係やコミュニティなど社会とのつながり	0.051 ***	0.136 ***	0.249 ***	0.221 ***	0.232 ***	0.207 ***
8. 政治・行政・裁判所への信頼性	-0.030 ***	-0.033 ***	0.017 *	0.028 ***	0.049 ***	-0.074 ***
9. 生活を取り巻く空気や水などの自然環境	-0.029 ***	-0.022 **	-0.022 *	-0.047 ***	-0.020 *	0.115 ***
10. 身の周りの安全	0.014	-0.013	-0.003	0.002	0.029 **	0.112 ***
11. 子育てのしやすさ	-0.002	0.016	0.010	0.017	0.021 **	0.034 ***
12. 介護のしやすさ・されやすさ	-0.042 ***	-0.034 ***	0.017	0.054 ***	0.082 ***	-0.052 ***
13. 生活の楽しさ・面白さ	0.391 ***	0.424 ***	0.193 ***	0.138 ***	0.128 ***	0.227 ***
女性ダミー	0.193 ***	0.203 ***	0.156 ***	-0.039	-0.006	0.322 ***
若年ダミー（15-39歳）	-0.035	0.041	0.004	-0.088 **	0.101 ***	0.014
高齢ダミー（65歳以上）	0.195 ***	0.196 ***	0.212 ***	0.150 ***	-0.047	-0.055
定数項	0.283 ***	-0.301 ***	-0.049	0.146 **	0.173 ***	1.030 ***
修正済み決定係数	0.672	0.695	0.579	0.536	0.539	0.474
サンプルサイズ	10,633	10,633	10,633	10,633	10,633	10,633

※***、**、*はそれぞれ1%、5%、10%水準で有意。

満足度の値として、計測されたままの標準化していないもの（最小値0点、最大値10点）を用いた。

5つの指標についてのここまでの分析から、「エウダイモニア」に関連する主観指標である「充実した人生を送れている」は相対的に「生活満足度」に近い動きを示した。また、「主観的な社会との信頼関係」に関連する主観指標の中でも、「人々に認められている」「人々や社会の役に立っている」「人と違うことを言っても受け止めてもらえる」の3つは相互に似たような動きを示し、「人々に支えられている」は、スコアが高いことも含めて、「充実した人生を送れている」を含む、他の4指標とはやや異なる動きがみられた。

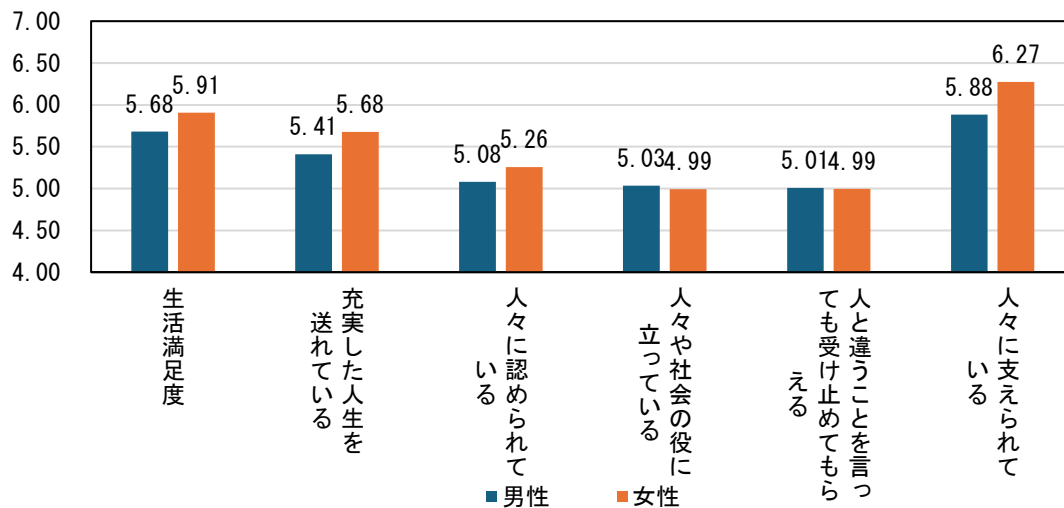
以下、属性別にみる。

2. 各指標の属性別比較

（男女別平均スコアの比較）

男女別に比較すると、「充実した人生を送れている」、「人々に認められている」、「人々に支えられている」の項目については、男性よりも女性の方でスコアが高かった。一方、「人々や社会の役に立っている」、「人と違うことを言っても受け止めてもらえる」の項目については、男女でほぼ同程度のスコアだった。

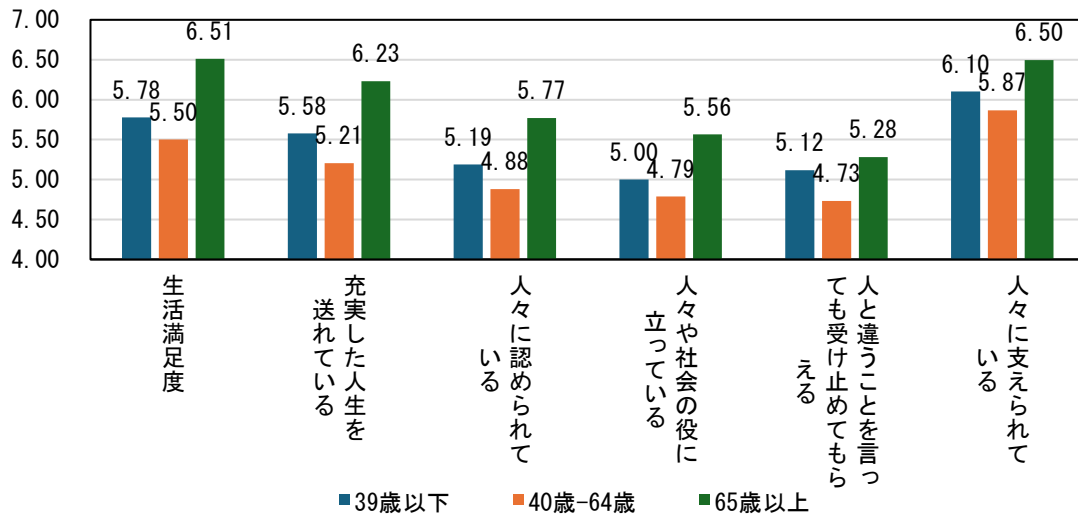
図表2－5 各指標の平均スコア（男女別）



（年齢階層別平均スコアの比較）

年齢階層別で各項目についてみると、いずれの項目も、ミドル層（40歳-64歳）のスコアが低く、高齢層（65歳以上）のスコアが高い。これは生活満足度と同様の傾向である。

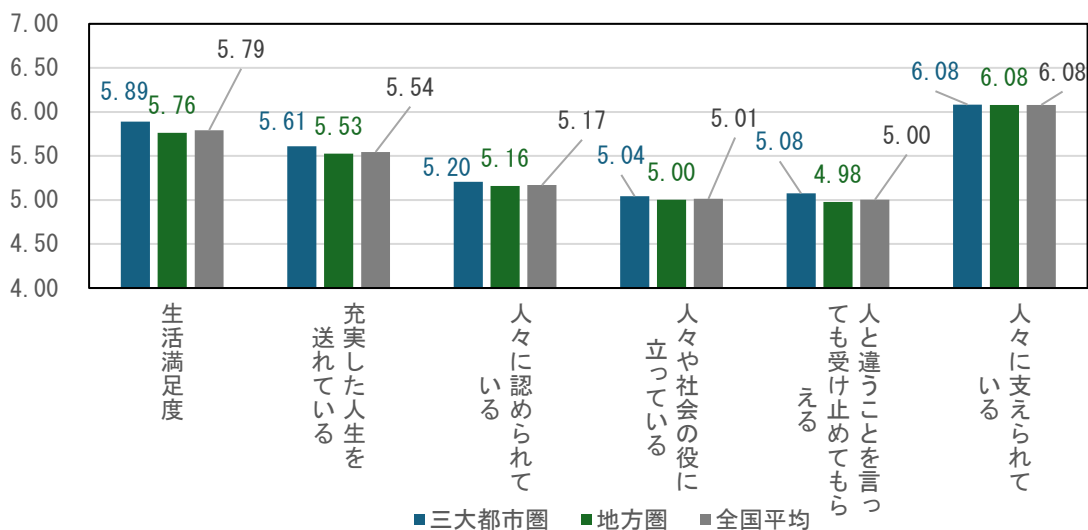
図表 2－6 各指標の平均スコア（年齢階層別）



（地域別平均スコアの比較）

地域別に平均スコアを比較すると、「充実した人生を送れている」、「人と違うことを言っても受け止めてもらえる」は、地方圏よりも三大都市圏の方が、スコアが高い傾向にある。「人々に支えられている」の項目については、三大都市圏と地方圏の差がほとんどない。

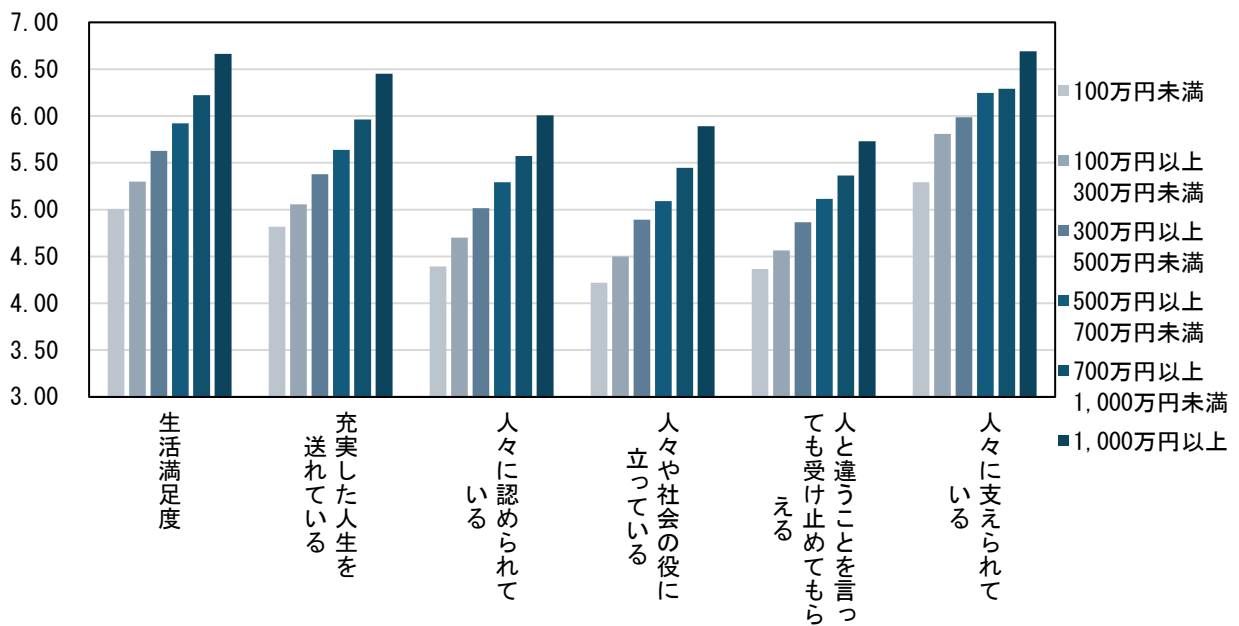
図表 2－7 各指標の平均スコア（地域別）



（世帯年収別平均スコアの比較）

各指標について世帯年収別に平均スコアを比較すると、世帯年収 100 万円未満から世帯年収 1,000 万円以上の範囲では、すべての指標で、世帯年収が高いほど、スコアが高い傾向が見られた。この中でも、「人々に支えられている」に関しては、他の 4 項目と異なり、世帯年収 100 万円－1,000 万円の間では、世帯年収の変化に対するスコアの上昇幅は比較的ゆるやかであった。

図表 2－8 各指標の平均スコア（世帯年収別）



（就業形態別平均スコアの比較）

JILPT(2023)¹⁵によれば、就業形態と主観的 Well-being の関連については、性別や配偶状態によって、水準や関連のあり方に違いがあるとされている。生活満足度と5つの主観的 Well-being 指標ではどのような傾向が見えるか確認するため、性別・婚姻状況別に、就業形態ごとの平均スコアを比較する。なお、就業形態の影響を見るため、64歳以下の現役世代を対象とした。

まず、婚姻状況に着目してみると、男女ともに、配偶者なしに比べて、配偶者ありのほうが、各項目のスコアが高い傾向が見られた。

その中で、就業形態別に比較すると、配偶者なしの場合、男女ともに、正規雇用¹⁶、非正規雇用¹⁷、非就業の順でスコアが高い傾向が見られた。一方で、配偶者ありの場合、男女ともに、どの項目でも正規雇用のスコアが高いことに変わりはないが、就業形態の違いによるスコア差は、配偶者なしの場合と比べて小さかった。

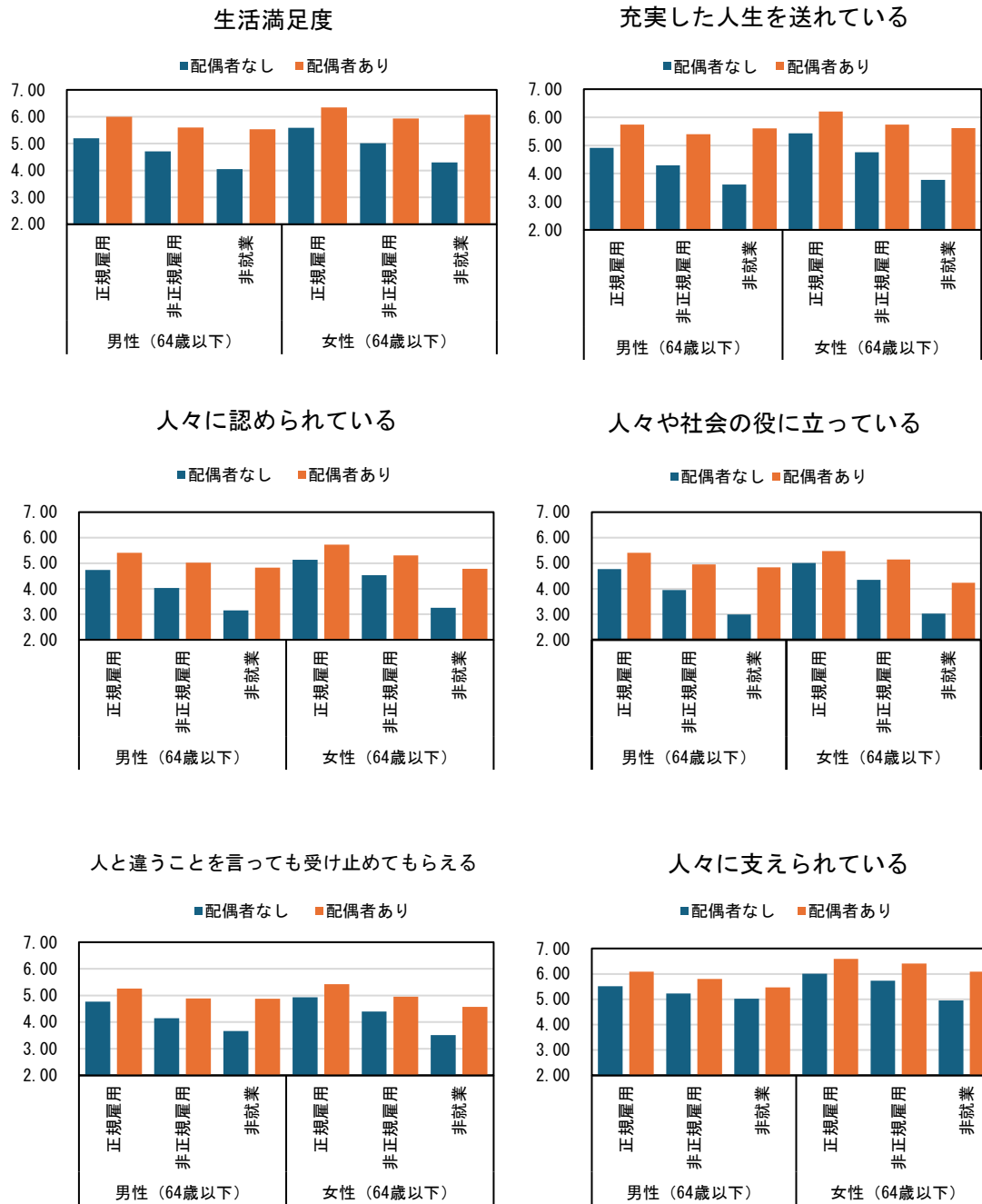
最後に、5つの指標に着目すると、配偶者なしの場合、男女ともに、「人々に支えられている」の項目については、就業形態の違いによるスコア差が小さく、就業形態による影響を受けにくいことが示唆された。

¹⁵ 独立行政法人労働政策研究・研修機構「JILPT 個人パネル調査『仕事と生活、健康に関する調査』第1回」JILPT 調査シリーズ No. 234, 2023 年 12 月

¹⁶ 労働契約の期間の定めがなく、労働時間がフルタイムのもの

¹⁷ 正規雇用以外のパート、アルバイト、契約・派遣社員、退職後再任用、その他有期労働者など

図表２－９ 各指標の平均スコア（性別・婚姻状況・就業形態別）

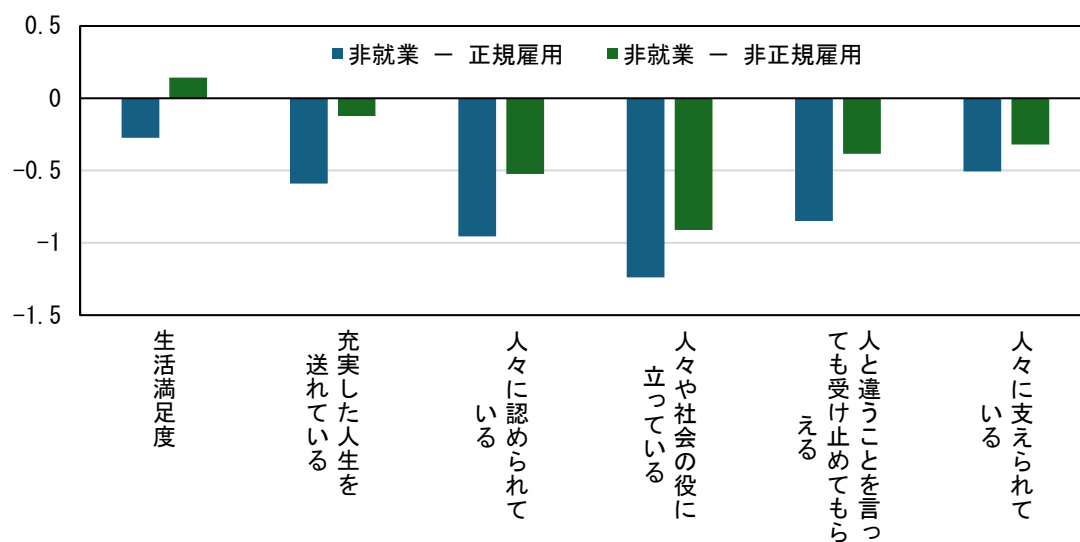


（配偶者がいる女性における就業形態間のスコア差）

配偶者ありの女性の場合、「生活満足度」「充実した人生を送れている」については、就業形態別ではあまり差がなかった。一方で、「人々に認められている」、「人々や社会の役に立っている」、「人と違うことを言っても受け止めてもらえる」の項目で、就業者（正規雇用、非正規雇用）と比べて、非就業者自身が感じるスコアが低く、スコア差が大きい傾向が見られた。配偶者ありの女性の非就業者に注目すると、仕事を通じた社会とのつながりが少ないことから、他者や社会との関係に関する満足

度で就業者とのスコア差が大きくなるが、一方で、生活満足度や「充実した人生を送れている」といった点では、相対的にスコア差が小さいと考えられる。

**図表 2－10 配偶者がいる非就業女性の
他の就業形態（有配偶）との各指標の平均スコア差**



（備考）64 歳以下を対象

第3章 共働き世帯の生活満足度

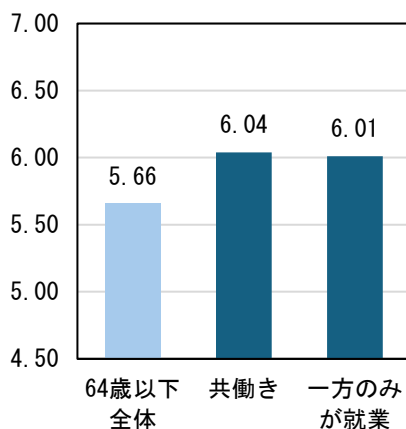
共働き世帯の割合は、近年、家計の経済的事情や社会の価値観の変化により増加しており、その数は専業主婦世帯よりも多くなっている。こうしたことも踏まえ、今回の調査では、新たに配偶者の就業状況に関する設問を追加した。本章では、現役世代（15歳～64歳）のうち、夫婦が共働きである世帯の生活満足度について分析する。

（女性は共働き世帯の満足度が相対的に高い）

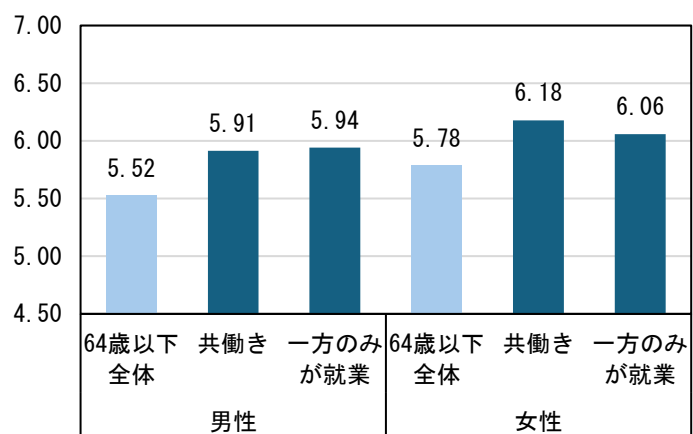
共働き世帯¹⁸の生活満足度をみると、単身世帯も含めた64歳以下全体¹⁹の生活満足度と比べて高く、また、夫婦の一方のみが就業している世帯と同程度となっている。また、回答者が女性の場合は、一方のみが就業の世帯と比較しても共働き世帯の方が高くなっている。

図表3－1 共働き世帯の生活満足度

（1）世帯の構造別



（2）男女別



（男女とも、相対的に、若年層は共働き世帯の満足度が高い）

次に、男女別、年齢階層別にみると、男性の回答者では、若年層では、共働き世帯の生活満足度が、世代の平均や一方のみが就業の世帯の平均よりも高くなっている。ミドル層では、共働き世帯は世代平均よりは高いが、一方のみが就業の世帯よりも満足度が低くなっている。

女性の回答者では、若年層については男性の回答者と同様、共働き世帯は、世代の平均や一方のみが就業の世帯よりも高い。ミドル層では、男性の回答者と異なり、

¹⁸ 本章における共働き世帯及び一方のみが就業の世帯は、世帯内に配偶者がいる場合としている。単身赴任などにより、婚姻はしているが世帯内に配偶者がいない例があるとみられるが、議論を簡単にするためにそうした例を除いている。なお、本章における「就業者」には、議論を簡単にするために学生のアルバイトは含めていない。

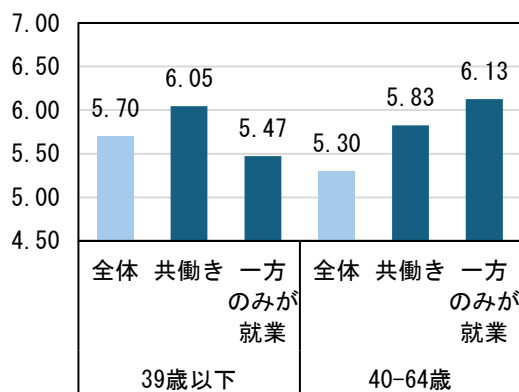
¹⁹ 世帯内に配偶者がいない世帯や単身の世帯、本人が非就業者の世帯を含む。

共働き世帯は一方のみが就業の世帯とほぼ同水準となっている。

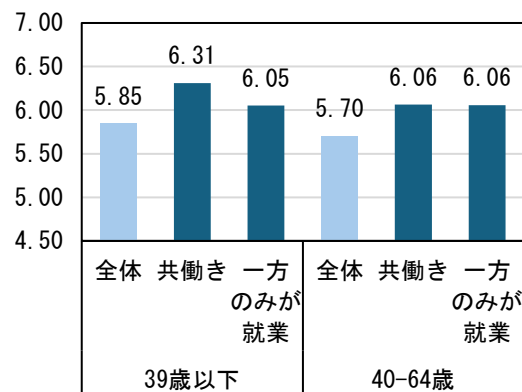
こうした結果について、要因としては様々なものが考えうるが、例えば、世代間の考え方の違い（若年層では周囲にも共働き世帯が比較的多いが、ミドル層以上では夫は仕事、妻は家庭といった考え方が一部に残っている可能性）、所得面の影響（若年層を中心に共働きで生計を立てる）などがありうる。

図表 3－2 共働き世帯の生活満足度（年齢階層別）

（１）男性



（２）女性



（世帯年収に関わらず、男性の若年層では共働き世帯の満足度が高く、ミドル層では、一方のみが就業の世帯が高い傾向）

上述したように、共働き世帯と一方のみが就業の世帯の満足度の違いとして、世帯年収の差が影響している可能性があるため、世帯年収別にみてもみる。

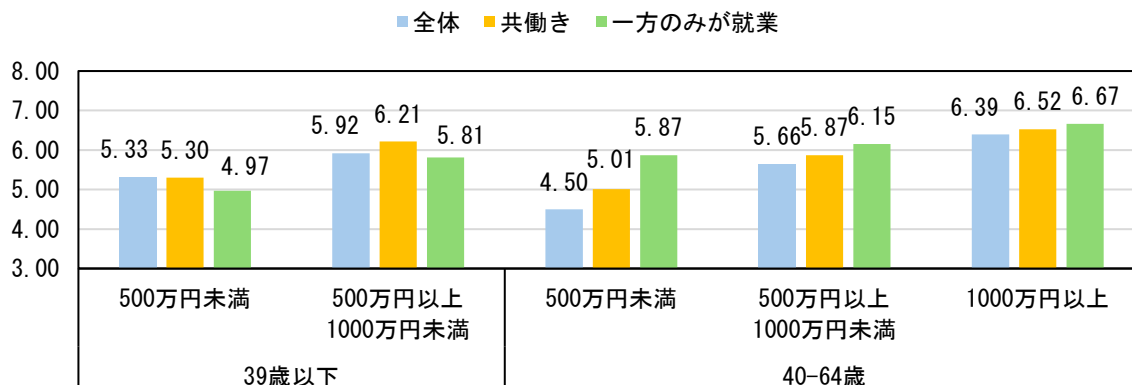
まず回答者が男性の場合、若年層²⁰については各年収階層で、共働き世帯の方が一方のみが就業の世帯よりも満足度が高く、ミドル層については各年収階層で一方のみが就業の世帯の方が共働き世帯よりも満足度が高いことから、所得による影響よりも、世代による考え方の違いが影響している可能性がある。

次に回答者が女性の場合、若年層・ミドル層ともに世帯年収 500 万円以上の層では、一方のみが就業の世帯の方が共働き世帯と同程度かそれよりも高いのに対し、500 万円未満の層では、共働き世帯の方が一方のみが就業の世帯よりも高くなっており、ある程度世帯所得が関係している可能性がある。

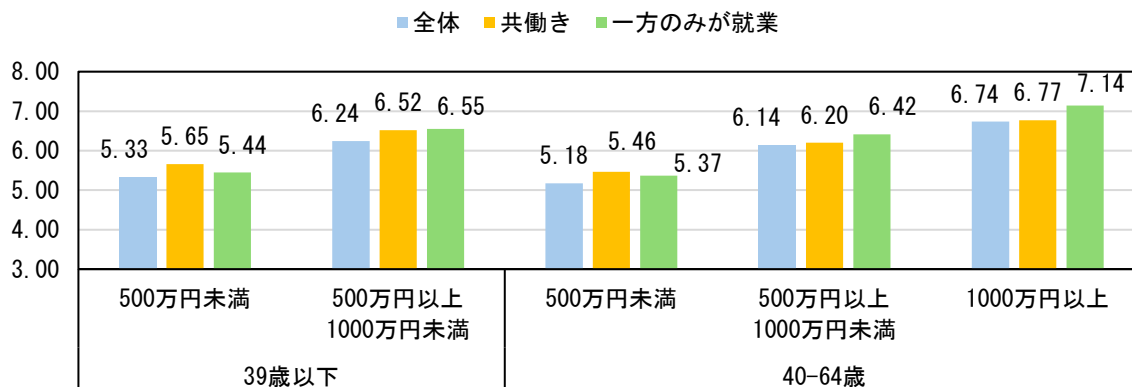
²⁰ 若年層は結婚している世帯、一方のみが就業している世帯、高年収の世帯がいずれも相対的に少ない傾向にあることから、世帯年収 1000 万円以上については特に一方のみが就業の世帯のサンプル数を十分に確保できず、図表から省略した。

図表3-3 共働き世帯の生活満足度（世帯年収別）

(1) 男性



(2) 女性



（子どもがいる世帯の満足度は、総じて共働き世帯の方がやや高い傾向）

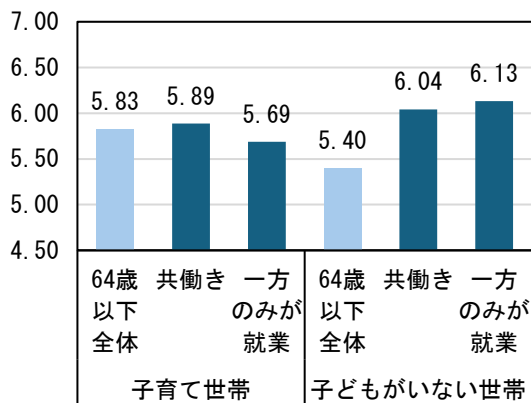
次に、子育て世帯²¹の生活満足度についてみる。男女ともに、共働き世帯の満足度は一方のみが就業の世帯よりもやや高くなっている。

子どもがいない世帯については、回答者が女性の場合、共働き世帯の満足度が高く、一方のみが就業の世帯との差はやや大きくなっている。回答者が男性の場合、一方のみが就業の世帯がやや高くなっている。一概に論ずるのは難しいが、共働き世帯の生活満足度が高い傾向にある背景としては、共働きにより所得が増えることや、仕事を通じた自己実現などにより生活満足度が高まりやすいことが挙げられる。また、子育て世帯では共働き世帯と一方のみが就業の世帯の差がやや縮まる背景としては、子育てに時間・労力・費用を要することと仕事とのバランスなどが挙げられる。

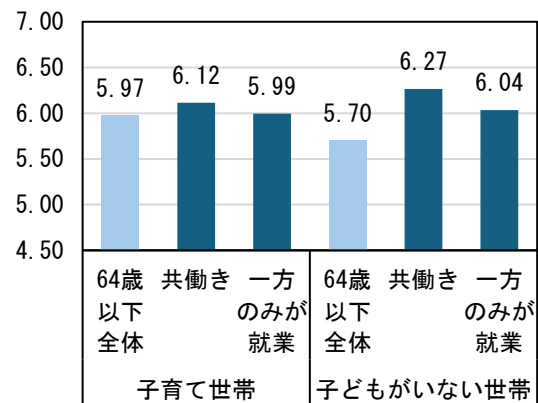
²¹ ここでは便宜上、世帯内に本人との続柄として「子」が含まれ、かつ、未就学から高校までの子ども（孫を除く）が含まれている場合を子育て世帯とした。

図表 3－4 共働き世帯の生活満足度（子どもの有無）

（１）男性



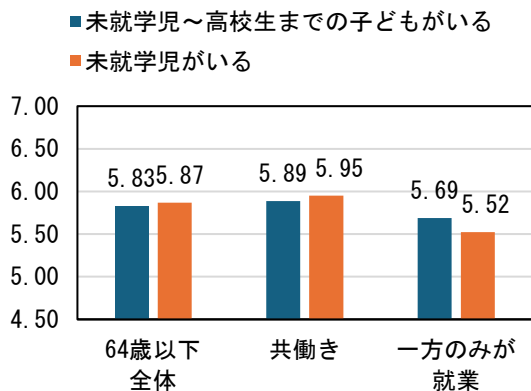
（２）女性



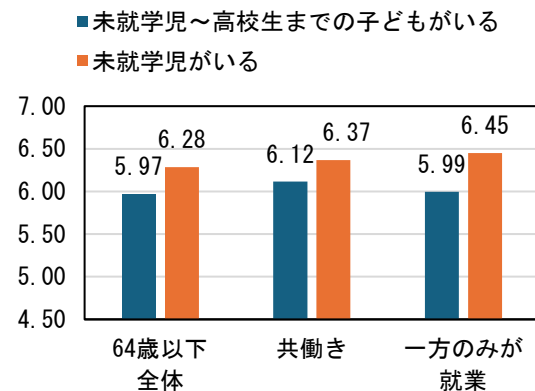
また、子どもの学齢段階の違いをみると、子育て世帯のうち、女性の回答者については、未就学児がいる場合、一方のみが就業の世帯の満足度が最も高くなり、共働き世帯も含めて、子育て世帯全体（高校生までの子どもがいる世帯の平均）と比べて満足度が顕著に高まる。男性の回答者については、未就学児がいる場合も共働き世帯の方が満足度が高く、子育て世帯全体と比べて傾向の顕著な違いはみられない。

図表 3－5 共働き世帯の生活満足度（未就学児がいる場合）

（１）男性



（２）女性



（分野別にみても、子どもがいる場合は総じて共働き世帯の満足度が高い傾向）

分野別の様々な満足度で見ると、女性については、子育て世帯か子どもがいない世帯かによらず、共働き世帯の方が、一方のみが就業の世帯よりも総じて満足度が高い傾向にある（子どもがいない世帯における「子育てのしやすさ」のみ関係が逆転）。

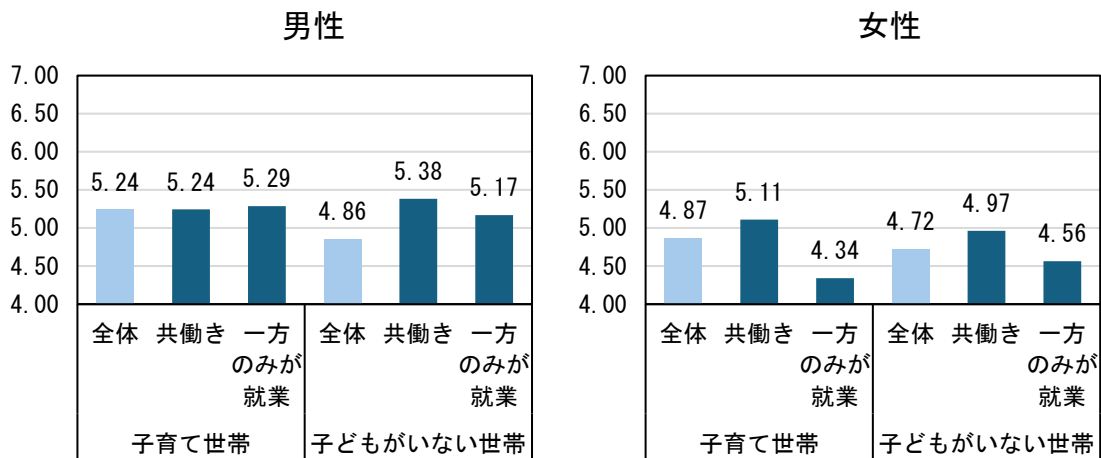
女性について、「雇用環境と賃金」についての満足度は、子育て世帯では子どもがいない世帯と比べ、共働き世帯と一方のみが就業の世帯の差が大きく、子育てにか

かる費用などの存在により夫婦両方の労働所得があるかどうかの影響が大きくなっている可能性がある。また、「ワークライフバランス」については、子育て世帯でも子どもがいない世帯でも共働き世帯の満足度が高いが、子育て世帯では一方のみが就業の世帯の満足度が低い。子育て世帯における一方のみが就業の世帯のサンプルはほとんどが専業主婦世帯であり、子育て等に費やされる時間と自身が自由に使える時間などとのバランスという意味でのワークライフバランスの満足度を押し下げている可能性がある。「子育てのしやすさ」は、子どもがいない場合と比べて、実際に子育てをしている世帯の方が感じている満足度は高く、特に、共働き世帯で顕著に高い。「生活の楽しさ・面白さ」は、子育て世帯か子どもがいない世帯かによらず、一方のみが就業の世帯より、共働き世帯の方が高い。

他方、男性については、子どもがいない世帯ではおおむね共働き世帯の満足度が一方のみが就業の世帯に比べて同程度か高い傾向があるが、「ワークライフバランス」のみ共働き世帯の方が低い。また、子育て世帯でも共働き世帯の満足度は一方のみが就業の世帯に比べておおむね高い傾向にあり、子どもがいない世帯と異なり「ワークライフバランス」も共働き世帯の方が高くなっている。「雇用環境と賃金」については差がみられない。

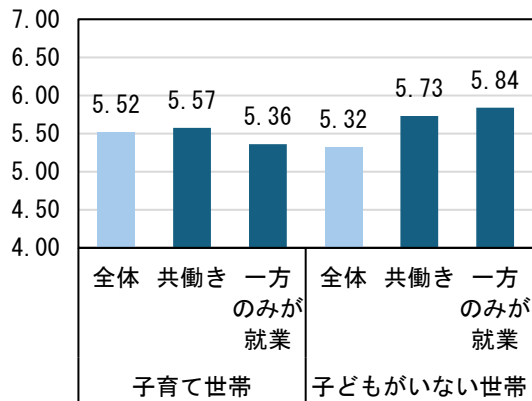
図表 3－6 共働き世帯・一方のみ就業世帯と分野別満足度（子どもの有無）

（１）「雇用環境と賃金」

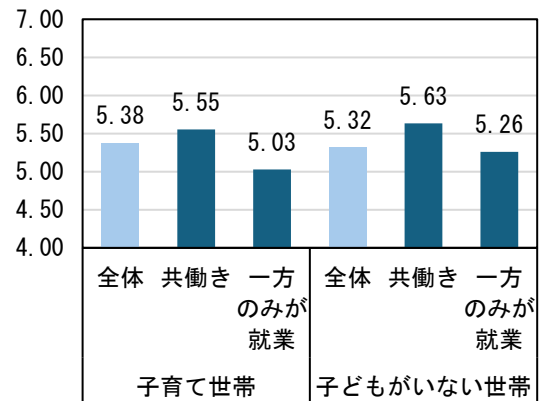


(2) 「仕事と生活（ワークライフバランス）」

男性

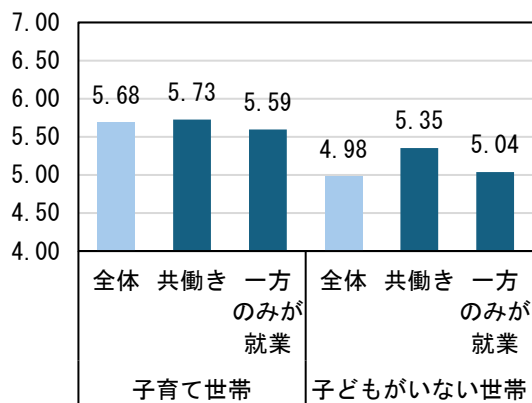


女性

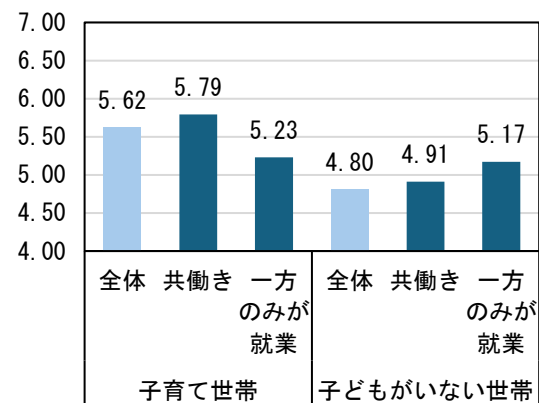


(3) 「子育てのしやすさ」

男性

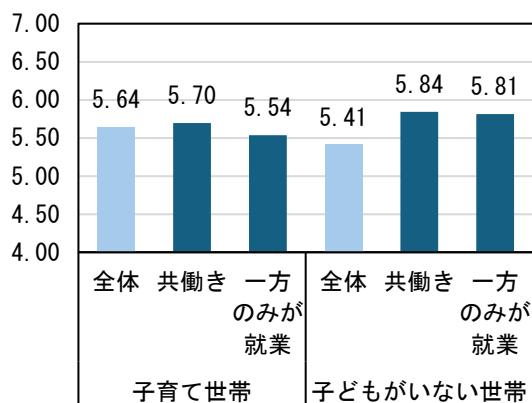


女性

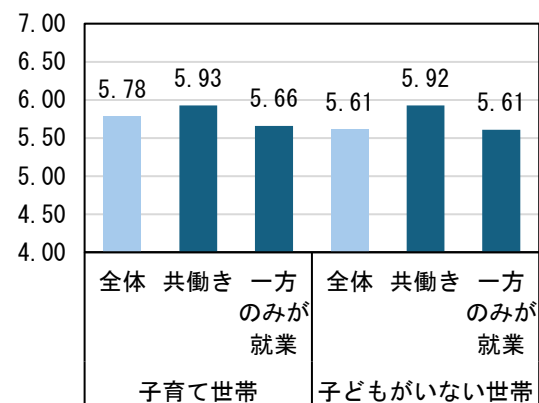


(4) 「生活の楽しさ・面白さ」

男性



女性



第4章 社会とのつながりと満足度

社会とのつながりは生活満足度との関係が深いと考えられる。オンラインツールの普及やSNSの発達などにより人とつながる方法や機会は多様化し、少子高齢化や地方の過疎化の進行など、社会とのつながりを巡る環境は近年大きく変化している。

本章では、社会とのつながりの状況が、生活満足度や分野別満足度にどのように影響しているかを分析する。特に、今回の調査では、日常生活を送る上での第三の居場所（サードプレイス）に関連した質問を追加し、仕事や家庭生活だけではない人の時間の過ごし方をより多面的にとらえようと試みている。

1. 「交友関係やコミュニティなど社会とのつながり」満足度の動向

分野別満足度「交友関係やコミュニティなど社会とのつながり」（以下「社会とのつながり満足度」という。）について、経年の動向を確認する。

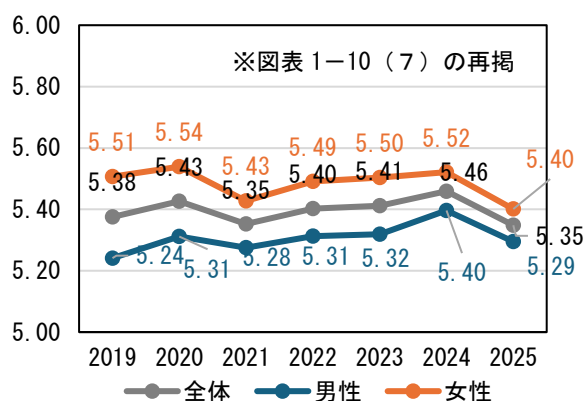
全体の動きを見ると、2021年にコロナ禍の影響で落ち込んだものの、2022年、2023年は以前の水準に戻り横ばいで推移した。2024年は特に男性の満足度の上昇により全体も押し上げられた。2025年の満足度は0.11ポイント低下している。

男女別にみると、継続的に、女性の社会とのつながり満足度は男性の満足度を上回っている。2025年は昨年より男女ともに0.1ポイント程度低下した。

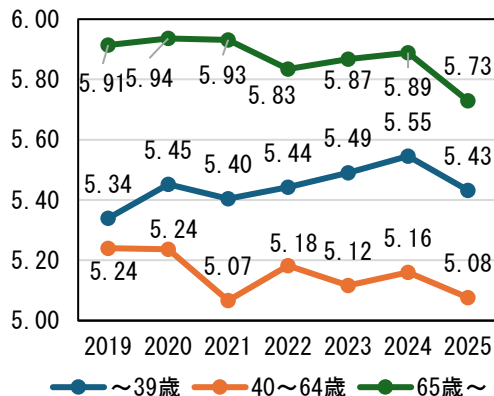
年齢階層別にみると、若年層は、2025年は低下したものの、2019年以降緩やかな上昇傾向で推移している。ミドル層、高齢層は経年で低下傾向にある。

図表4-1 「社会とのつながり」満足度の推移

(1) 男女別



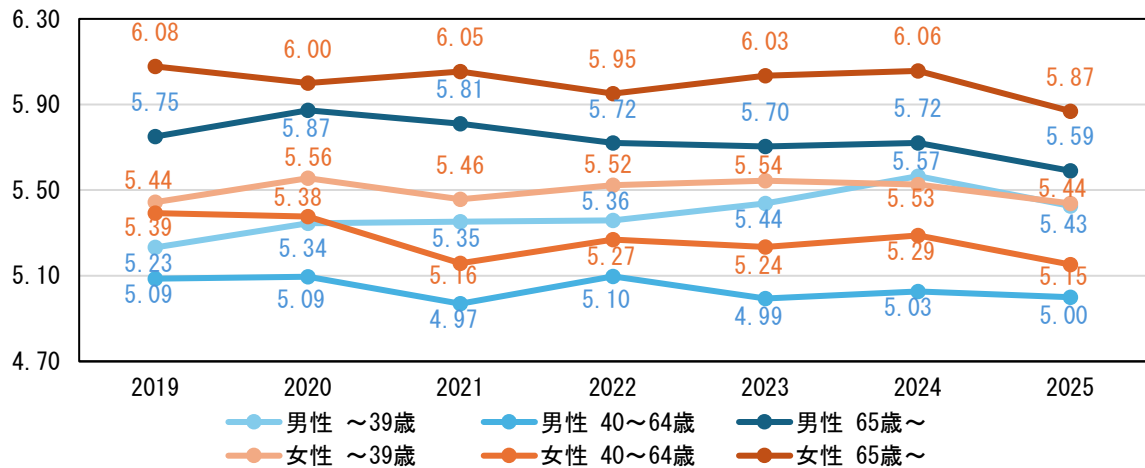
(2) 年齢階層別



次に、社会とのつながり満足度の変化を男女・年齢階層別で確認する。同年代で比較すると、女性が男性を上回る傾向にあるが、2024年以降、若年層では男性と女性の差はほとんどない。前述の若年層の「社会とのつながり」満足度の緩やかな上

昇は、男性の満足度の改善の影響があると考えられる。ミドル層や高齢層については、男女いずれの場合でも、経年で低下傾向にある。

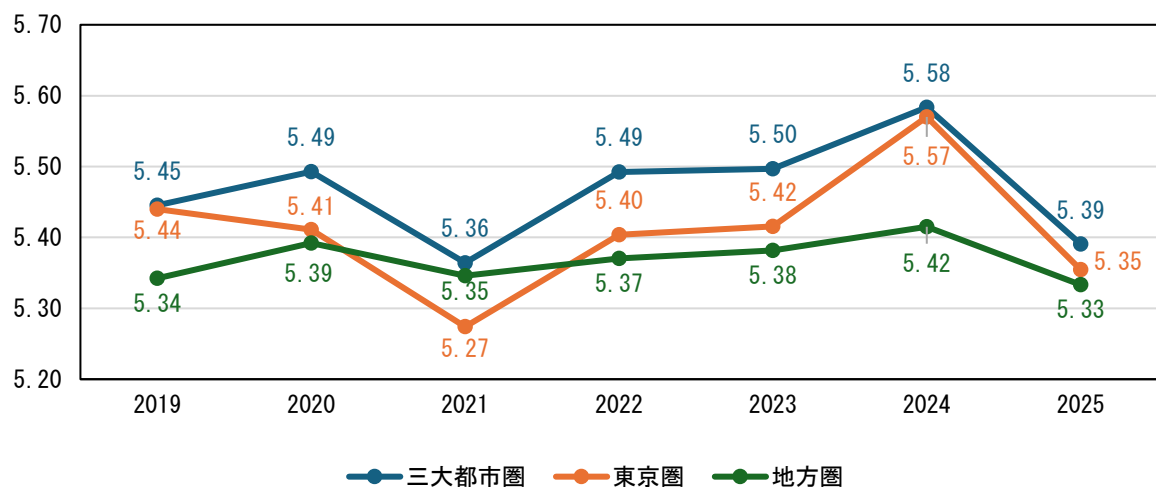
図表４－２ 「社会とのつながり」満足度の推移（男女・年齢階層別）



（地域別の社会とのつながり満足度の動向）

地域別にみると、コロナ禍の 2021 年には三大都市圏において満足度が低下し、コロナ禍を終えた 2024 年にかけて上昇していることがうかがえる。三大都市圏のうち、東京圏は特に変化が大きい。他方、地方圏はおおむね横ばい傾向にあることがわかる。

図表４－３ 「社会とのつながり」満足度の推移（地域別）

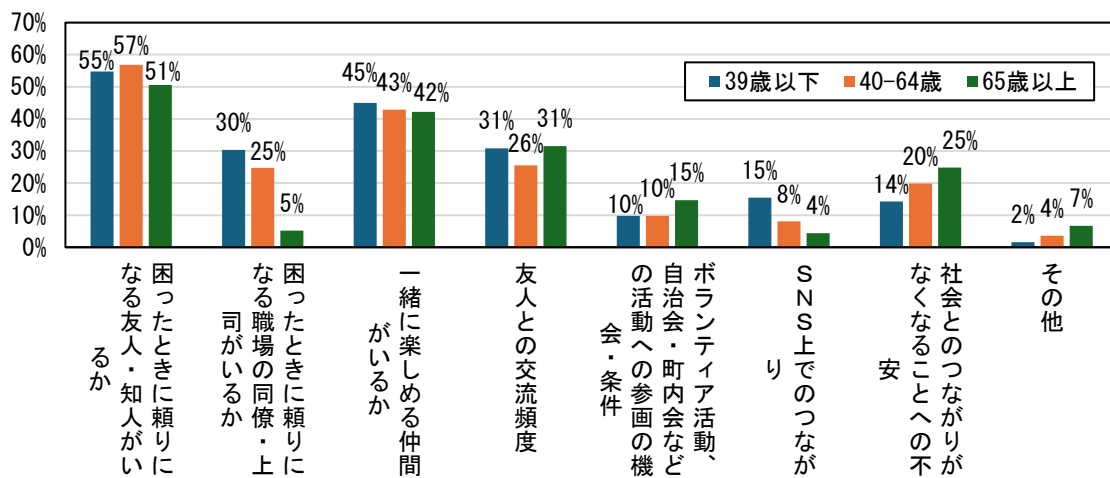


（社会とのつながりに影響を与えている要因）

社会とのつながりに関する満足度に大きく影響している項目について分析する。

いずれの年代も、「困ったときに頼りになる友人・知人がいるか」の影響が大きく、次いで、「一緒に楽しめる仲間がいるか」である。周囲の友人や知人などの存在が、社会とのつながりにおいて重要視されていることがわかる。また、若い世代では、他の世代に比較すると「一緒に楽しめる仲間がいるか」や「SNS上でのつながり」の影響がやや大きく、高齢の世代ほど「ボランティア活動などの活動への参画の機会・条件」や「社会とのつながりがなくなることへの不安」の影響がやや大きい。

図表４－４ 社会とのつながりに関する満足や不満に大きく影響している項目（選択率、複数選択可）



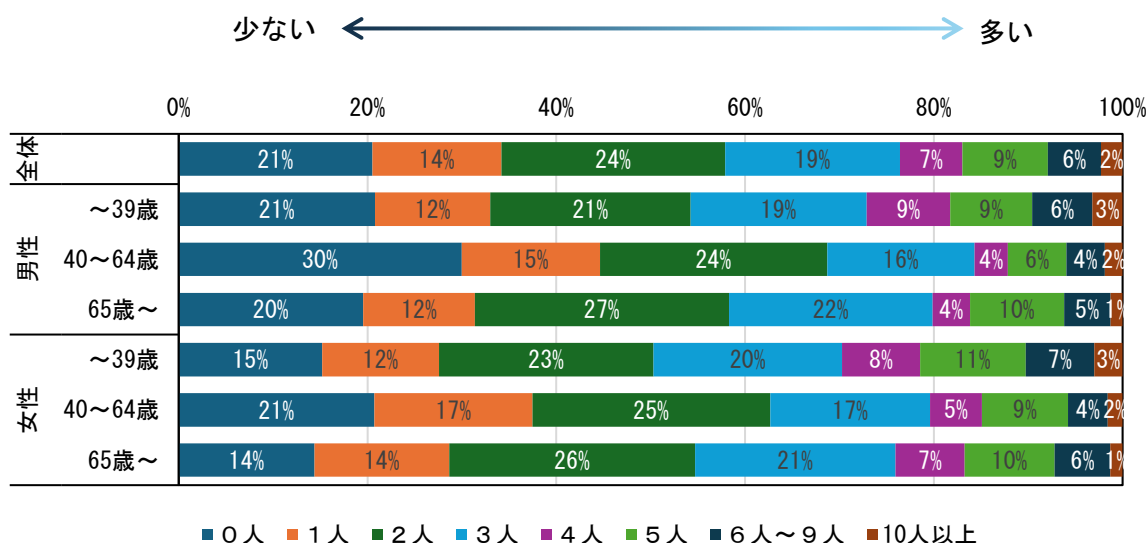
２．人との交流と社会とのつながり満足度の動向

前項でみたように、社会とのつながり満足度の動向に影響を与えている項目を確認すると、「困ったときに頼りになる友人・知人がいるか」や、「一緒に楽しめる仲間がいるか」といった、主に周囲にいる人の存在の影響が大きいことから、そういった人の有無や人数と、社会とのつながり満足度の関係を分析する。

（困ったときに頼りになる人の数の動向と社会とのつながり満足度）

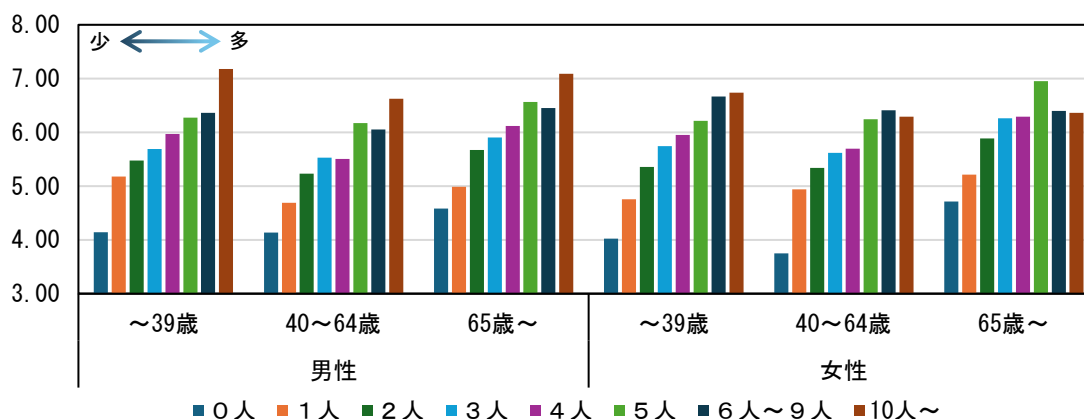
同居する家族・親族以外で困ったときに頼りになる人の数をみると、３人以上との回答が半数近くに上る一方、０～１人と答えた人も全体の３割程度を占めた。男女で比較すると、男性よりも女性の方が人数は多い。年齢階層別に比較すると、ミドル層で相対的に人数が少ない。

図表４－５ 困ったときに頼りになる人の数（男女、年齢階層別）
（同居の家族・親族を除く）



次に、頼りになる人の人数と社会とのつながり満足度を確認すると、いずれの世代でも、頼りになる人の人数が増えると満足度も上昇する傾向にある。

図表４－６ 困ったときに頼りになる人の数と社会とのつながり満足度
(男女・年齢階層別)

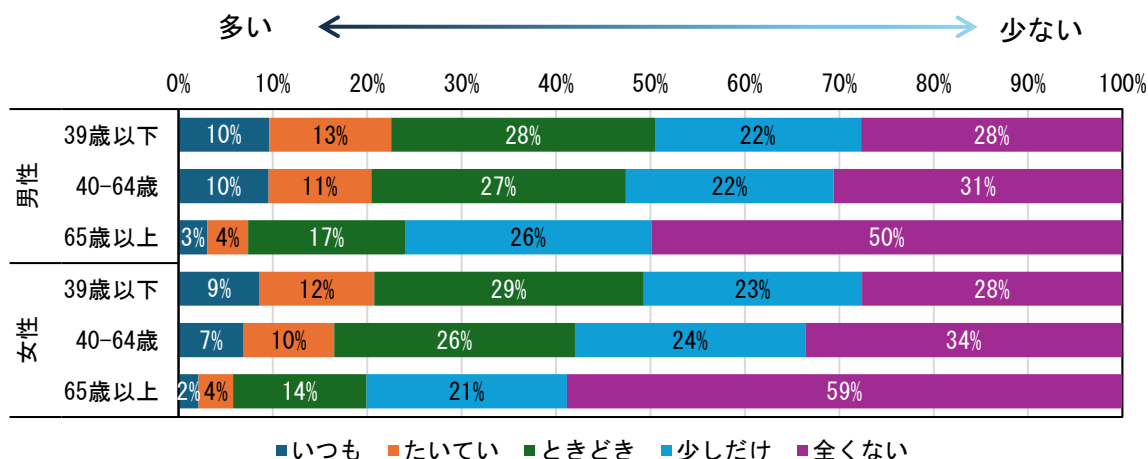


(回答者の生活の状況と満足度)

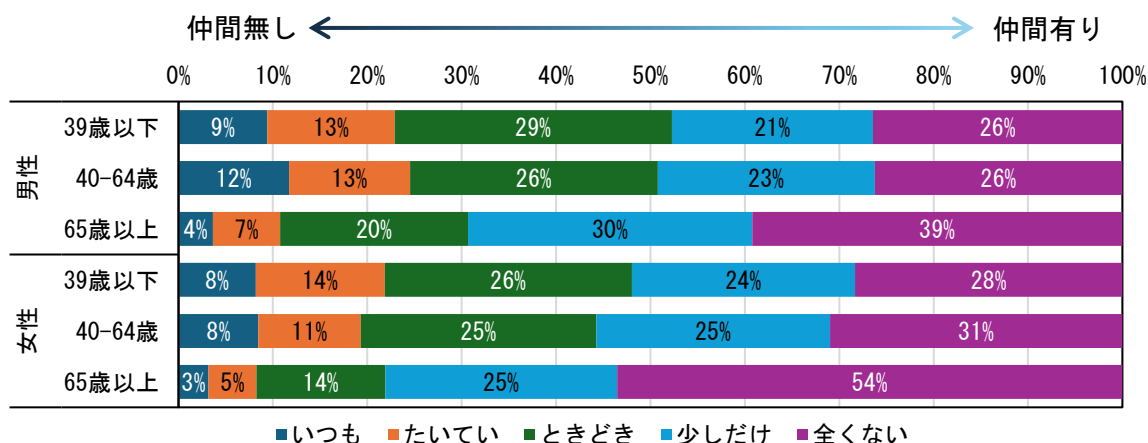
今回の調査では、回答者の最近の生活の状況について尋ねる設問を設けている。このうち、社会とのつながりに関連する「自分は孤独であると感じる」と「一緒に楽しめる仲間がいないと感じる」の設問への回答傾向を見ると、「自分は孤独であると感じる」、「一緒に楽しめる仲間がいないと感じる」の頻度は、若年層とミドル

層が相対的に高い²²。

図表４－７ 「自分は孤独であると感じる」頻度（男女、年齢階層別）



図表４－８ 「一緒に楽しめる仲間がいなく感じる」の回答割合（男女、年齢階層別）



（困ったときに頼りになる人の数と心の健康状態）

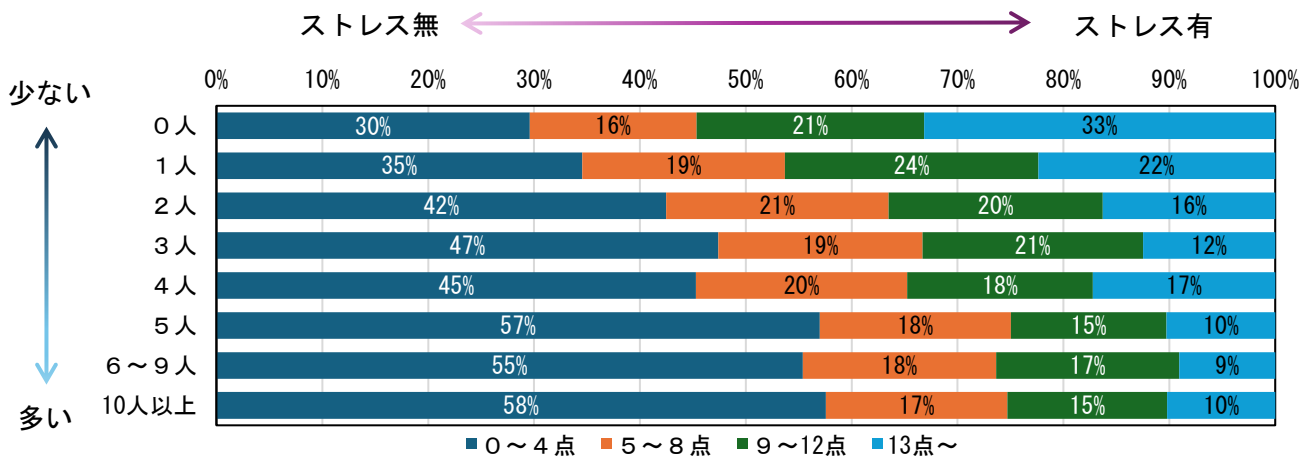
ここまで、困ったときに頼りになる人の数や、回答者の最近の状況などと、満足度との関係を確認した。この頼りになる人の数と、心の健康状態をチェックすることができる、いわゆるK 6²³との関係を確認する。

²² 「自分は孤独であると感じる」、「一緒に楽しめる仲間がいなく感じる」頻度と生活満足度との関係を確認したところ、頻度が低いほど生活満足度が高い傾向が見られた。関連図表は補論４に掲載の通り。

²³ K 6 とは、うつ病・不安障害などの精神疾患をスクリーニングすることを目的として開発された心の健康状態を測る指標のひとつ。「1. 神経過敏に感じましたか」、「2. 絶望的だと感じましたか」、「3. そわそわ、落ち着きがなくなりましたか」、「4. 気分が沈んで、何が起ころうとも気が晴れないように感じましたか」、「5. 何

困ったときに頼りになる人の数が多いほど、特にストレスを感じている状態ではない（K 6 が 0 ～ 4 点）の選択割合が高い。頼りになる人の数が少ないとストレスを感じている（K 6 が 5 点以上）割合が高くなっていることから、困ったときに頼りになる人の数は、満足度だけでなく精神的な健康状態へも影響がある可能性がある。

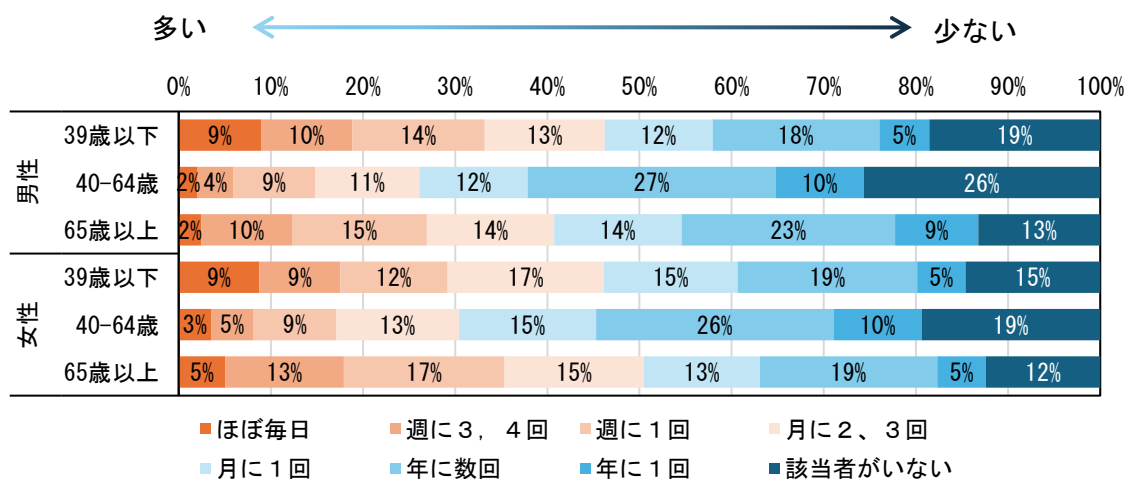
図表 4－9 困ったときに頼りになる人の数と K 6 スコア



（友人等との交流の満足度への影響）

続いて、友人・知人等との交流頻度を男女・年齢階層別に見ると、若年層と高齢層がミドル層に比べて高いことがわかる。男女のミドル層に着目すると、「該当者がいない」の割合が他の年齢階層に比べて高くなっているほか、交流の頻度についても、相対的に頻度が低いとの回答が多かった。

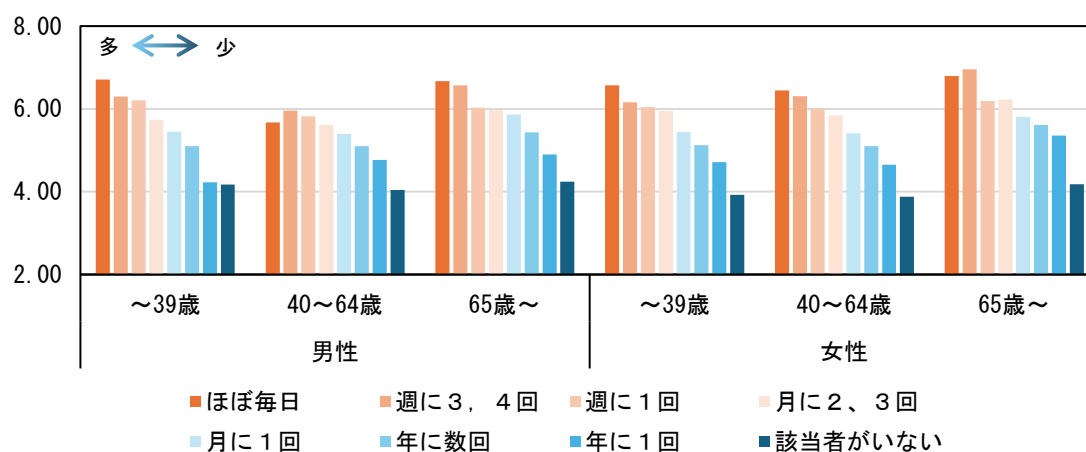
図表 4－10 友人・知人等との交流の頻度（男女、年齢階層別）



をするのも骨折りだと感じましたか」、「6. 自分は価値がない人間だと感じましたか」の6項目について、「いつも」（4点）、「たいてい」（3点）、「ときどき」（2点）、「少しだけ」（1点）、「全くない」（0点）の5段階で回答したものを点数化し、合計点数が高いほど精神的な健康状態が悪い可能性があると考えられる。

加えて、友人・知人等との交流頻度と社会とのつながり満足度について確認すると、交流の頻度が高い方が満足度も高くなる傾向にあることがわかる。

図表 4-11 友人・知人等との交流の頻度と社会とのつながり満足度の動向



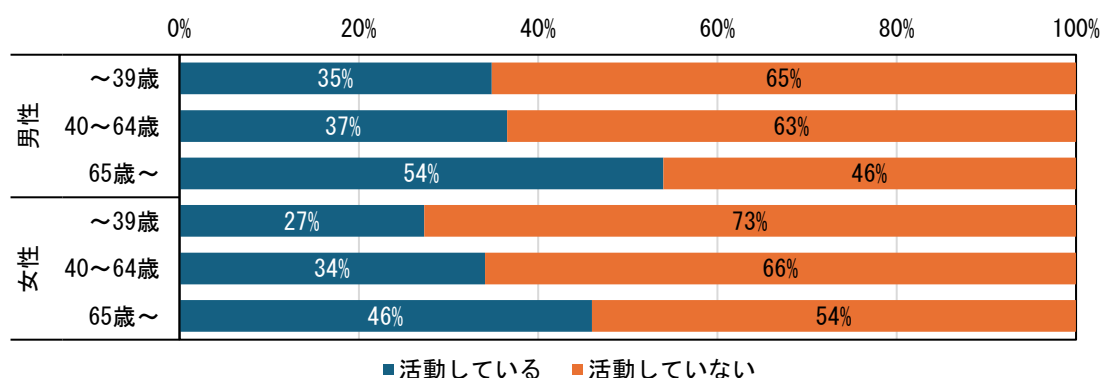
3. ボランティア活動や地域コミュニティ活動と社会とのつながり満足度

社会とのつながりは、友人・知人などとのつながりも重要であるが、ボランティア活動や地域コミュニティ活動も社会とのつながりに関連があると考えられる。そうした活動の有無と社会とのつながり満足度の動向について確認する。

(ボランティア活動や地域コミュニティ活動等と社会とのつながり満足度の動向)

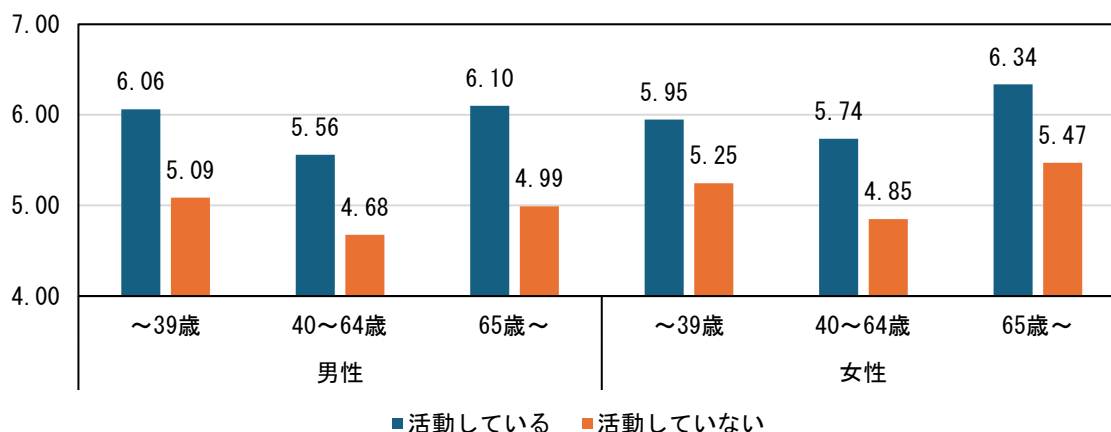
実際に活動している人と活動していない人の割合を男女別と年齢階層別でみると、年齢階層が上がると活動している割合も高くなる。65歳以上男性が、活動している割合が高いことがわかる。

図表 4-12 ボランティア活動や地域コミュニティ活動等の有無の割合



ボランティア活動をしている人は、社会とのつながりにおいて満足度が高い傾向にある。その傾向は、男女別・年齢階層別のどの区分でも見られた。

図表４－１３ 取り組んでいるボランティア活動や地域コミュニティ活動と社会とのつながり満足度の動向



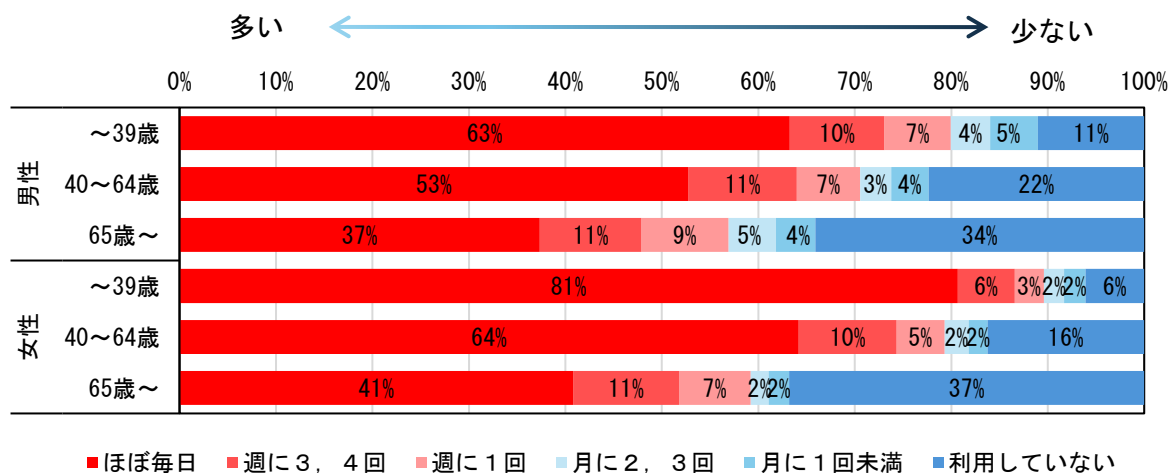
４．SNSでの交流と社会とのつながり満足度の動向

SNS上における人とのつながりも社会とのつながりの一要素となっていると考えられる。ここでは、SNSの利用傾向を確認するとともに、社会とのつながり満足度との関係に着目する。

（SNSの使用頻度と社会とのつながり満足度の動向）

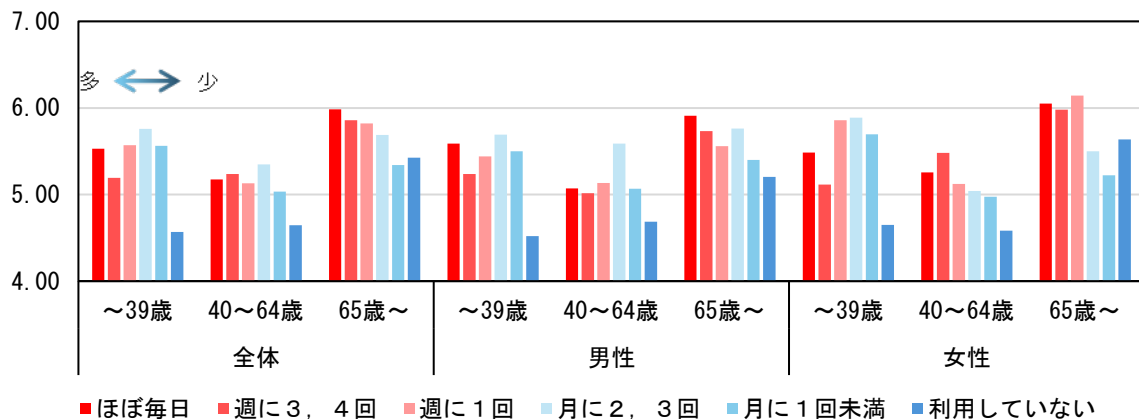
まずSNSの使用頻度について確認すると、若い世代であるほど使用頻度が高くなる傾向にあり、男性よりも女性がSNSを使用していることがわかる。特に、「ほぼ毎日」の回答は39歳以下の女性で約8割にも上るが、同年代の男性に比べて約2割高くなっている。

図表４－１４ SNS使用頻度（男女、年齢階層別）



次にSNSの使用頻度と社会とのつながり満足度を確認すると、若年層、ミドル層では、SNSを利用している者は、「利用していない」と回答した者と比べると、社会とのつながり満足度は高い傾向となっている。一方で、使用頻度と満足度との間には明確な関係は見られなかった。

**図表 4-15 SNS使用頻度と社会とのつながり満足度
(男女、年齢階層別)**



5. サードプレイスと社会とのつながり満足度

日常生活において、家庭や職場・学校以外の場所で、人々が自由に交流し、リラックスできる第三の居場所（サードプレイス）を持つことが、ウェルビーイングの向上につながると言われている²⁴。今回の調査では、新たに、自身が持っているサードプレイスを聞く設問²⁵を設けた。ここではサードプレイスの有無や、実際にどういった場がサードプレイスとなっているか、分野別満足度「生活の楽しさ・面白さ」（以下、「生活の楽しさ・面白さ満足度」という。）等を交えながら考察する。

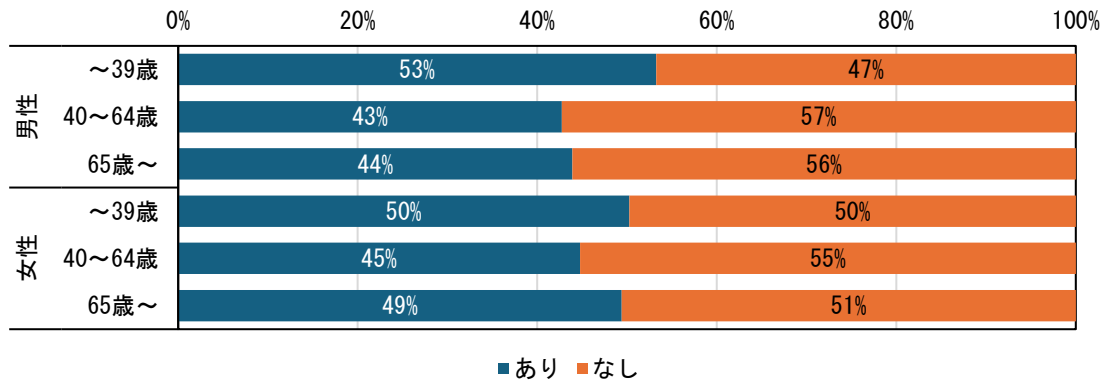
（サードプレイスの有無と生活の楽しさ・面白さ満足度）

サードプレイスの有無について、男女別および年齢階層別にみると、おおよそ2人に1人の割合で、サードプレイスがあると回答している。

²⁴ 橋本 成仁・今村 陽子・海野 遥香・堀 裕典[2022]、『サードプレイスと主観的幸福感に関する研究』

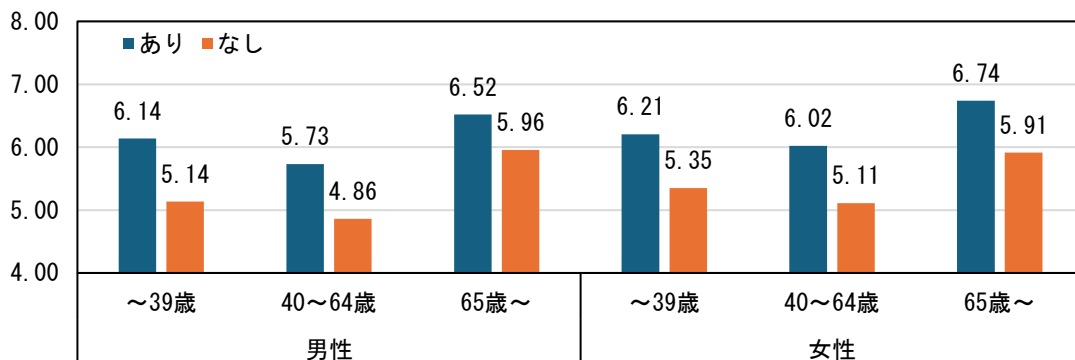
²⁵ 今回の調査におけるサードプレイスは次のように定義した。①家と職場（学校）以外の日常生活で訪れる第三の居場所、②居心地が良い、馴染み、お気に入りの場所、③自ら積極的に行こうと思える場所、④最低でも2, 3か月程度に一度は訪れる場所、以上の4点を満たす場所とした。ただし恋人や友人の家などの私的な場所や生活上必要不可欠な場所は除くこととした。

図表 4-16 サードプレイスの有無（男女、年齢階層別）



また、サードプレイスの有無別に生活の楽しさ・面白さ満足度を確認すると、いずれの性別・世代別にみても、サードプレイスがある者の満足度が高い。そのうち、サードプレイスの有無で差が最も大きいのは、39歳以下の男性であった。

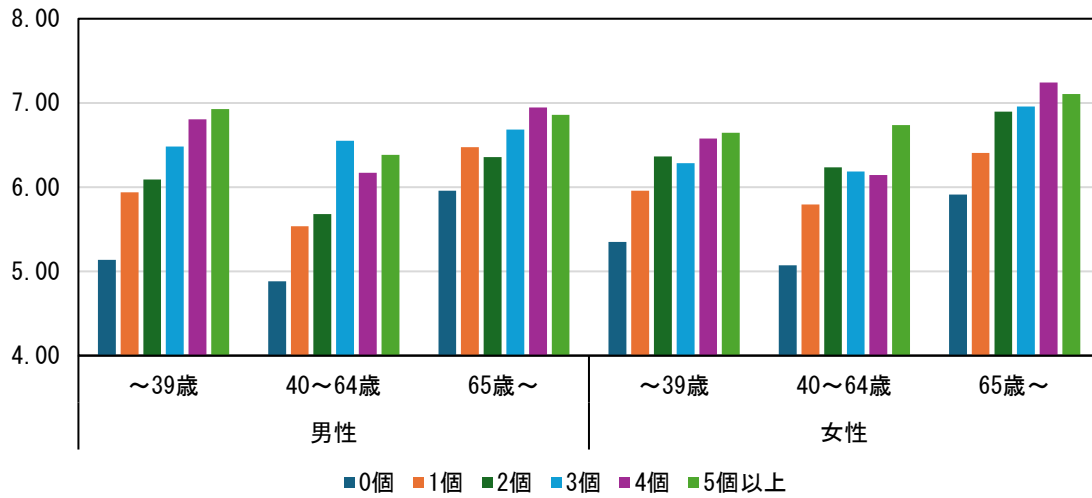
図表 4-17 サードプレイスの有無と生活の楽しさ・面白さ満足度



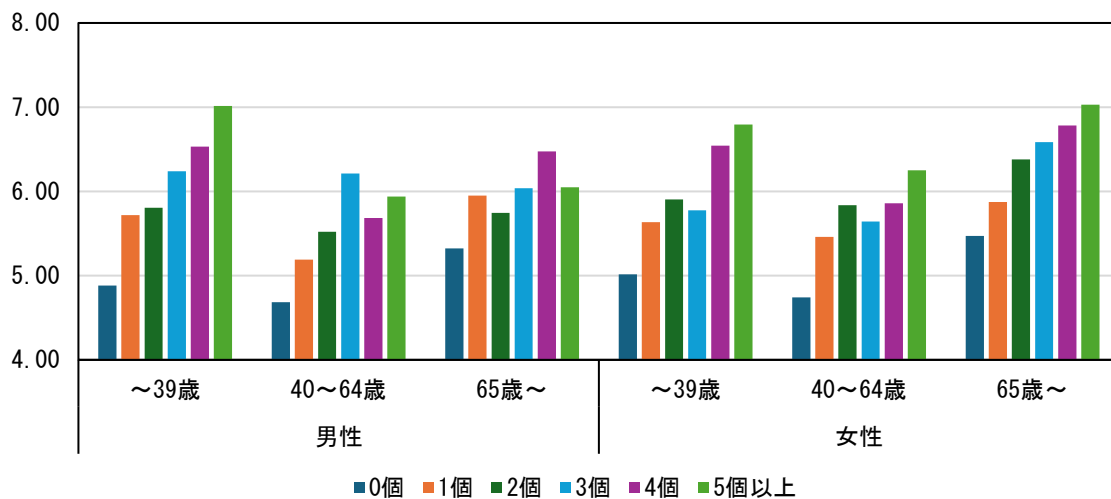
（回答者の持つサードプレイスの数と分野別満足度の関係）

回答者が持つサードプレイスの数と生活の楽しさ・面白さ満足度、社会とのつながりに関する満足度を分析すると、多くのサードプレイスを持つ人はいずれの満足度も高い傾向にある。

図表 4-18 サードプレイスの数と生活の楽しさ・面白さ満足度



図表 4-19 サードプレイスの数と社会とのつながり満足度

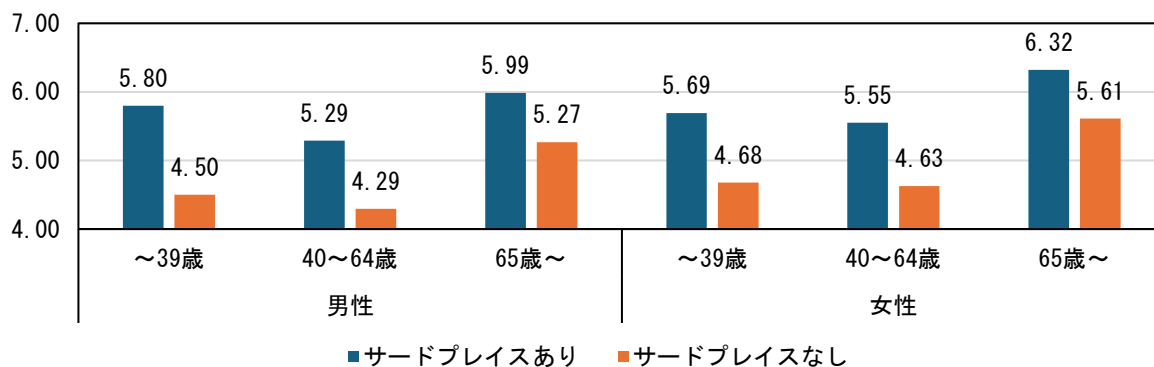


(サードプレイスの有無と「主観的な社会との信頼関係」に関連する指標との関係)

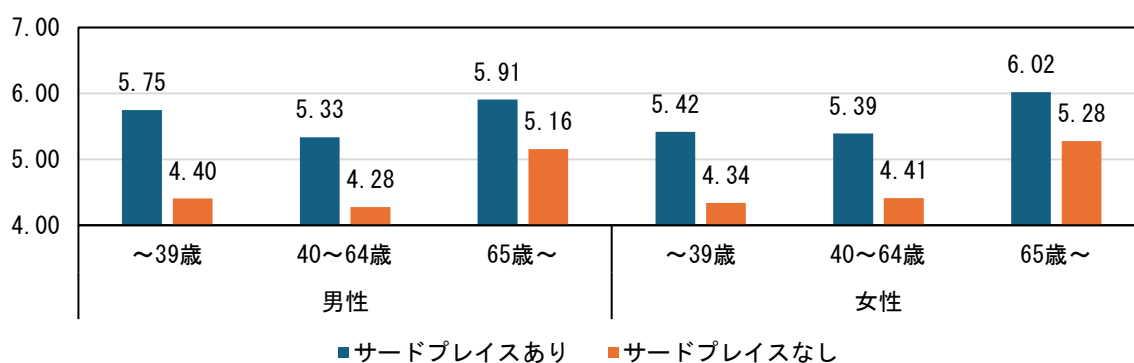
サードプレイスの有無別に「主観的な社会との信頼関係」に関連する4指標のスコアを確認すると、いずれもサードプレイスがある方が高い。

図表 4-20 サードプレイスの有無と「主観的な社会との信頼関係」に関連する4指標のスコア

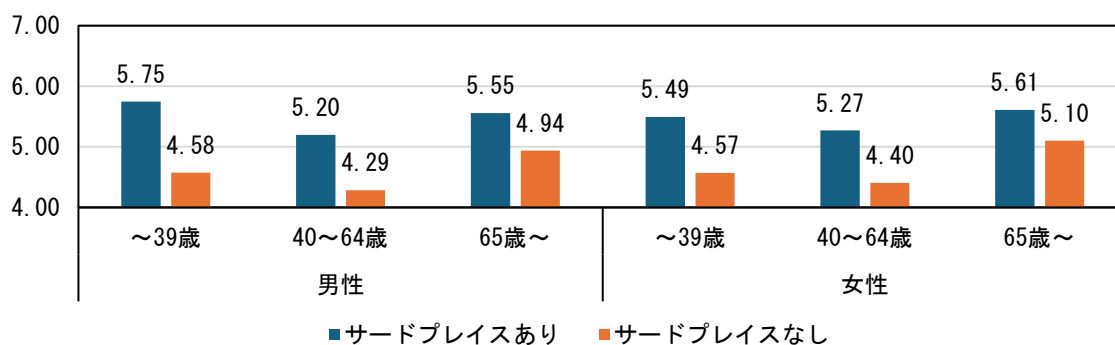
(1) 人々に認められている



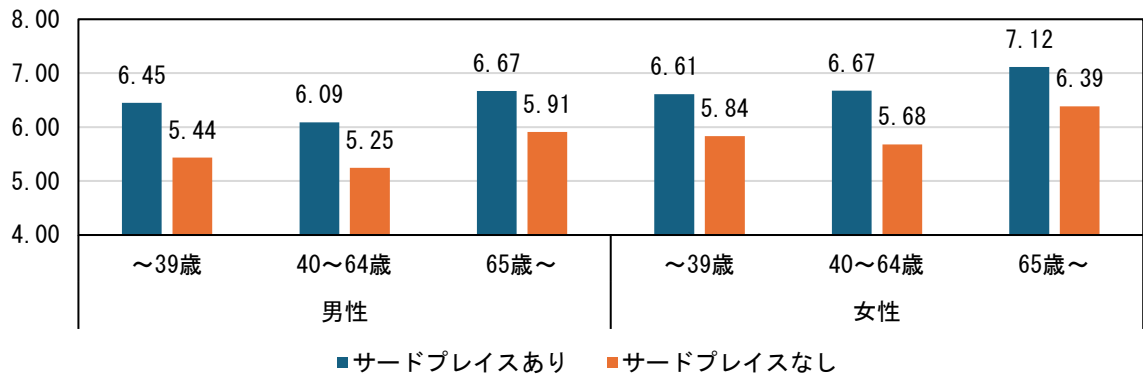
(2) 人々や社会の役に立っている



(3) 人と違うことを言っても受け止めてもらえる



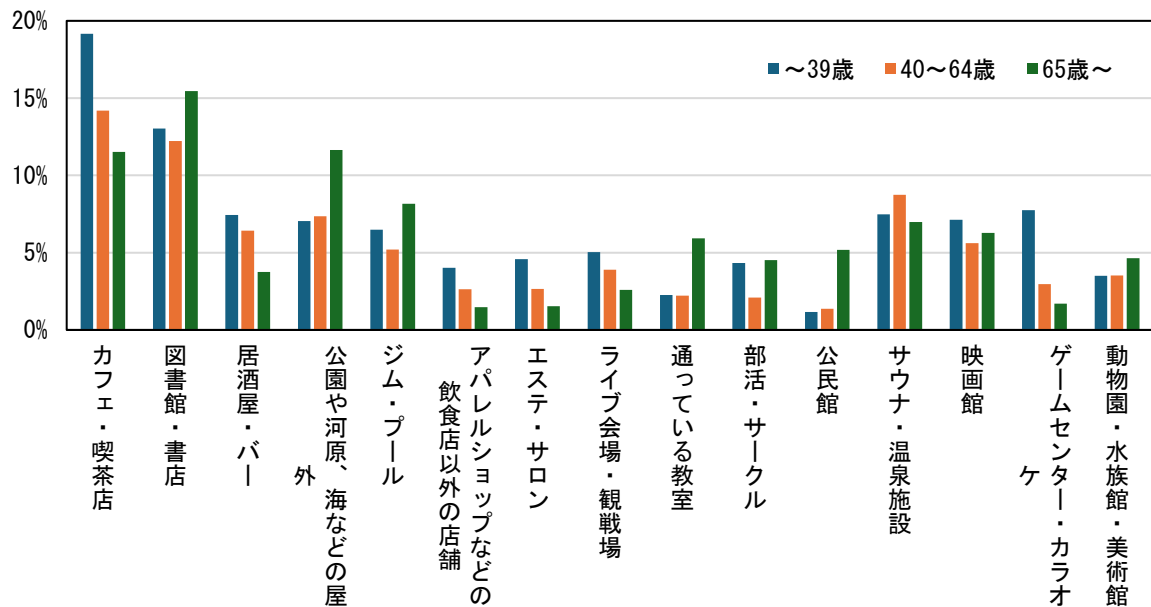
(4) 人々に支えられている



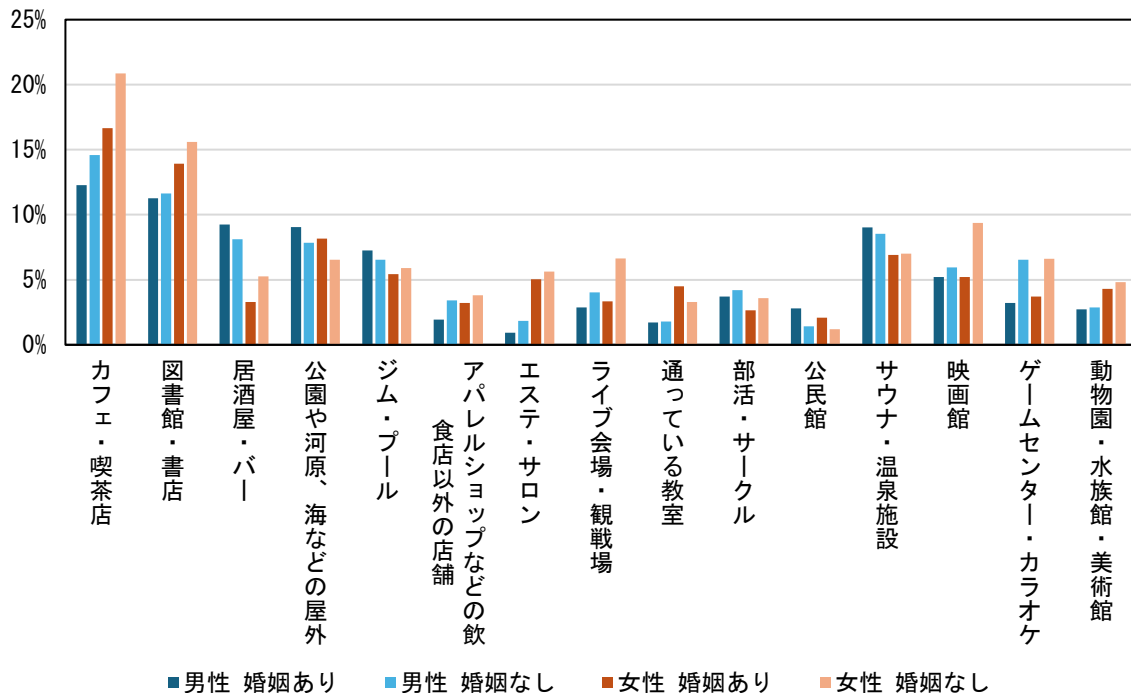
(各場所について、自身のサードプレイスに当たると回答した人の割合)

サードプレイスの選択率を見ると、「カフェ・喫茶店」や「図書館・書店」などが高いことがわかる。また、年代別にみると、「公民館」は高齢層の選択率が高く、「ゲームセンター・カラオケ」は若齢層の選択率が高いなど、サードプレイス毎に傾向が異なる。男女別・婚姻の有無で見ても、サードプレイス毎に選択率に違いがある。

図表4-21 サードプレイスの選択率（年齢階層別）



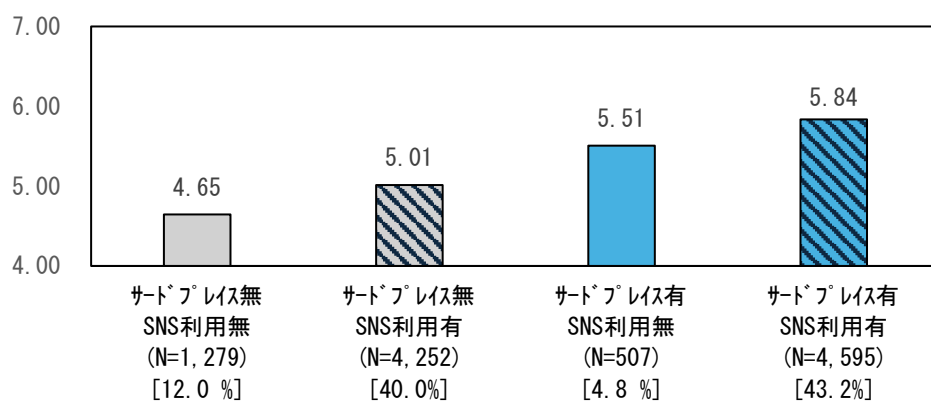
図表４－２２ サードプレイスの選択率（男女別・婚姻の有無）



（サードプレイス・SNSの有無別の社会とのつながり満足度）

本項の分析において、サードプレイスを物理的な居場所であると定義づけた。一方で、他者との関わりを生むという意味では、前項４．で分析したSNSも仮想的な人々の居場所として機能していると考えられる。そこで、サードプレイスの有無とSNSの有無別に、社会とのつながり満足度の状況を確認したところ、最も社会とのつながりの満足度が高いのは、サードプレイスを持ちSNSを利用している場合であり、反対に最も低いのはいずれの利用もない場合だった。サードプレイスを持っておらずとも、SNSを利用する場合は、SNSを利用しない場合と比べて社会とのつながりの満足度は高い。サードプレイスを持っている者の満足度には届いていない点には留意が必要であるが、SNSの利用が、仮想的なサードプレイスとなっている可能性がある。

図表 4-23 社会とのつながり満足度
(サードプレイス・SNS利用の有無別)



(備考) [] 内は全サンプル10,633に占める割合。

おわりに

（本報告書のまとめ）

内閣府「満足度・生活の質に関する調査」は2019年2月に初回の調査が行われ、今回の調査が7回目となる。本報告書で明らかになったことを次に簡潔にまとめる。

第1章では、生活満足度の経年変化等に着目して分析を行った。2025年調査における生活満足度は、一進一退の動きのなかで、前年から0.10ポイント低下し、2年前の2023年と同程度の水準となった。男女別、年齢階層別、雇用形態別にみても、同様の傾向がみられ、一昨年と同程度の水準となった。低下幅は、前年調査で上昇幅が大きかった男性や若年層で大きかった。分野別満足度をみると、「雇用環境と賃金」、「仕事と生活（WLB）」などで上昇し、「社会とのつながり」、「子育てのしやすさ」などで低下した。

第2章では、今回の調査で試行的に追加した、「エウダイモニア」や「主観的な社会との信頼関係」などに関連する5つの質問への回答傾向を分析した。

- ・「エウダイモニア」に関連する「充実した人生を送れている」との質問に対する回答傾向は、「生活の楽しさ・面白さ」や「家計と資産」等との相関が高く、「生活満足度」と比較的類似している。加えて、「社会とのつながり」の回帰係数が三番目に大きいなど、「生活満足度」とはやや異なる傾向もみられた。
- ・「主観的な社会との信頼関係」に関連する質問のうち、「人々に認められている」、「人々や社会の役に立っている」、「人と違うことを言っても受け入れられる」に対する回答傾向は、相互に似たような傾向を示し、いずれも「社会とのつながり」の要素がより強く反映される傾向がみられた。
- ・「主観的な社会との信頼関係」に関連する質問のうち、「人々に支えられている」に対する回答傾向には、「家計と資産」との正の相関がみられないほか、平均スコアも高いなど「生活満足度」や他の4指標とは異なる傾向がみられた。

「エウダイモニア」や「主観的な社会との信頼関係」といった生活満足度以外の主観指標についても、Well-beingをより包括的に把握することができる可能性が示唆された。

第3章では、今回の調査で追加した配偶者の就業状況に関する設問を用いて、共働き世帯の生活満足度についての分析を行った。男女とも、相対的に、若年層は共働きの満足度が高い傾向がみとれた。満足度の違いには、共働きによって夫婦両方の労働所得が得られることの影響や、世代間での考え方の違いなどが影響している可能性が考えうる。また、子育て世帯の満足度は、総じて、共働き世帯の方が一方のみが就業の世帯より高い傾向がみられた。子どもの年齢が低く未就学児がいる世帯に限ると、女性では一方のみが就業の世帯の方が若干高いが、共働き世帯も含めて生活満足度の水準は高い傾向がみられた。加えて、総合生活満足度以外の分野別満足度でみると、その世代の平均的なスコアに比して、総じて共働き世帯の満足度が高い傾向がみられた。

第4章では、「社会とのつながり」の観点から、日常生活を送る上で仕事、家庭生活だけでなく、リラックスする場、新たな交流の場として期待される「第三の居場所（サードプレイス）」について分析を行った。性別や年齢階層に関わらず、おおむね半数の方がサードプレイスを持っているとの回答であった。さらに、サードプレイスの数が多いほど、「生活の楽しさ・面白さ」、「社会とのつながり」に関する満足度が高くなる傾向がみられた。また、SNSの利用に関し、使用頻度と「社会とのつながり」の満足度との関係を確認すると、利用していない者と比べて、利用している者の満足度は高くなっている。ただし、使用頻度と満足度との間には明確な関係は見られなかった。

（今後の展望）

我が国における Well-being への関心は着実に高まっており、企業による調査²⁶によると、「ウェルビーイング」という言葉の認知度は、2022 年が 20.8%であったのに対して、2024 年は 31.1%となった。Well-being に目を向ける自治体や企業の数も徐々に増えてきている。

「経済財政運営と改革の基本方針 2025」においては、「Well-being の高い社会の実現に向け、働く、学ぶ、健康、子育て、地域の生活に関連する基本計画や大綱において、生活の Well-being 改善につながる実効的な K P I の設定を進めるとともに、Well-being の把握を継続・強化する。」と記載されており、より一層、人々の Well-being 向上の観点からの政策や民間での取組が拡大・進展することが期待される。このためには、本調査のような、人々の Well-being を主に主観の面から把握する取組や、また、客観的な指標から把握する取組を通じて、Well-being を高める施策や取組の効果を、より精緻に「見える化」し、施策の推進につなげることが重要である。

今後の「満足度・生活の質に関する調査」の実施に当たっては、Well-being 指標を用いた分析や政策への反映についてのニーズが高まっていることも踏まえ、適切な調査方法等を検討していく。

²⁶ 株式会社電通「第 18 回ウェルネス 1 万人調査」（2024 年 9 月 9 日公表）。

補論

1. 調査の概要・設計

(1) 目的 我が国の経済社会の構造を人々の満足度 (Well-being) の観点から多面的に把握し、政策運営に活かしていく

(2) 調査方法 WEB 調査

(3) 調査期間 2025 年 3 月 14 日 (金) ～ 3 月 31 日 (月)

(4) 対象者 日本国内に住む 15～89 歳のインターネットパネル登録モニター

(5) サンプル特性
(年齢階層別、性別)

	男性	女性	計
15－39 歳	2,475	2,532	5,007
40－64 歳	1,952	1,972	3,924
65－89 歳	854	848	1,702
計	5,281	5,352	10,633

(地域別、性別)

	男性	女性	計		男性	女性	計
北海道	122	125	247	滋賀県	107	108	215
青森県	107	108	215	京都府	113	114	227
岩手県	107	108	215	大阪府	136	140	276
宮城県	113	113	226	兵庫県	123	126	249
秋田県	106	107	213	奈良県	107	108	215
山形県	106	107	213	和歌山県	106	106	212
福島県	109	109	218	鳥取県	100	111	211
茨城県	114	114	228	島根県	106	106	212
栃木県	109	110	219	岡山県	109	110	219
群馬県	109	110	219	広島県	113	114	227
埼玉県	131	133	264	山口県	108	108	216
千葉県	127	127	254	徳島県	106	106	212
東京都	157	160	317	香川県	106	106	212
神奈川県	139	140	279	愛媛県	108	108	216
新潟県	111	112	223	高知県	103	109	212
富山県	106	106	212	福岡県	121	124	245
石川県	107	107	214	佐賀県	104	108	212
福井県	106	106	212	長崎県	108	108	216
山梨県	101	111	212	熊本県	108	109	217
長野県	110	110	220	大分県	106	108	214
岐阜県	109	110	219	宮崎県	106	107	213
静岡県	117	118	235	鹿児島県	108	108	216
愛知県	132	132	264	沖縄県	106	108	214
三重県	108	109	217				

	男性	女性	計
全国	5, 281	5, 352	10, 633
三大都市圏	1, 382	1, 399	2, 781
うち東京圏	554	560	1, 114
地方圏	3, 899	3, 953	7, 852

(6) 過去の調査との比較
(調査時期)

時点	調査時期
2019 年	2019 年（平成 31 年） 1 月 25 日（金）～ 2 月 7 日（木）
2020 年	2020 年（令和 2 年） 2 月 7 日（火）～ 2 月 20 日（木）
2021 年	2021 年（令和 3 年） 3 月 3 日（水）～ 3 月 11 日（木）
2022 年	2022 年（令和 4 年） 2 月 10 日（木）～ 2 月 28 日（月）
2023 年	2023 年（令和 5 年） 2 月 10 日（金）～ 3 月 5 日（日）
2024 年	2024 年（令和 6 年） 2 月 2 日（金）～ 2 月 28 日（水）
2025 年	2025 年（令和 7 年） 3 月 14 日（金）～ 3 月 31 日（月）

(性別サンプル推移)

時点	男性	女性	計
2019 年	5,102	5,191	10,293
2020 年	2,611	2,670	5,281
2021 年	2,589	2,645	5,234
2022 年	5,297	5,336	10,633
2023 年	5,289	5,344	10,633
2024 年	5,296	5,337	10,633
2025 年	5,281	5,352	10,633

(年齢階級別サンプル推移)

時点	15～24 歳	25～34 歳	35～44 歳	45～59 歳	60～89 歳	計
2019 年	1,792	1,837	1,959	2,128	2,577	10,293
2020 年	879	912	992	1,101	1,397	5,281
2021 年	907	937	998	1,076	1,316	5,234
2022 年	2,040	2,046	2,072	2,168	2,307	10,633
2023 年	2,040	2,046	2,072	2,168	2,307	10,633
2024 年	2,040	2,046	2,072	2,168	2,307	10,633
2025 年	1,886	2,195	2,077	2,168	2,307	10,633

(継続回答者サンプル推移)

時点	初回答時期							計
	平成 31 年	令和 2 年	令和 3 年	令和 4 年	令和 5 年	令和 6 年	令和 7 年	
2019 年	10,293	—	—	—	—	—	—	10,293
2020 年	0	5,281	—	—	—	—	—	5,281
2021 年	1,652	2,888	694	—	—	—	—	5,234
2022 年	3,925	2,180	231	4,297	—	—	—	10,633
2023 年	3,725	1,581	162	1,836	3,329	—	—	10,633
2024 年	2,680	1,338	102	1,111	1,275	4,127	—	10,633
2025 年	2,128	1,120	13	170	314	1,455	5,433	10,633

2. 今回調査における設問の変更点の整理

大分野	質問群		備考
	従来からの継続分	今回の追加分等	
総合	総合的生活満足度(Q1)		
	分野別主観的満足度(Q5の(1)～(13)) 各分野での重視事項(Q4の(1)～(13)) 関連する個別事項	分野別の不安についての質問を削除	分野別満足度は総合的生活満足度の7割弱を説明。各種政策との対応関係が比較的明瞭。
エンゲイモニア関連	日々の仕事のやりがい(Q14-4) 趣味や生きがいの有無(Q21-1) 趣味や生きがいの内容(Q21-2) (※1)	主観的にみた人生の充実度 (Q7-(1)) (第2章)	個人の内面や価値観との関係が大きく、公的機関がどこまで踏み込むべきか慎重な配慮が必要との考え方もある一方、政策的含意が得られる可能性も (※1 生活13分野の1つとして生活の楽しさ・面白さや、各分野での重視事項として労働のやりがい(Q4(2))や趣味や生きがいの充実(Q4(13))も質問)
その他	心の健康 (Q39の8項目のうちの(3)～(8))		個人的要因も大きいですが、健康以外の分野の満足度にも影響している可能性
	イベント 過去1年間で経験したこと(Q38)		
	社会との信頼関係 (※2)	4つの主観的質問(Q7-(2)～(5)) (第2章)	社会参加の促進などに関する政策的含意が得られる可能性も (※2 生活13分野として、政治・行政・裁判所への信頼性の満足度や、社会とのつながりの満足度、それに影響する要因Q4(4)を質問)
	居場所 無し	サードプレイス(Q25)(第4章5節)	同上
	基本属性 年齢、配偶関係、世帯規模と構成、都道府県・市町村	配偶者の就業状況(第3章)	分野別満足度に加えて、世帯構成や配偶関係も、総合生活満足度への追加的説明力がある。

注：大分野間には相互に重なる部分もある(相関関係については図表2-3を参照)

3. 主観的満足度とダッシュボードと活用の可能性

内閣府では、現在の生活にどの程度満足しているかを0～10点で自己評価する主観的な生活満足度等を調べる意識調査として、「満足度・生活の質に関する調査」を2019年から実施している。この調査においては、主観的 Well-being の代表的な指標として「総合的な生活満足度」を計測するだけでなく、これを客観的指標と紐づける分野別満足度を取り入れており、この結果を、「満足度・生活の質を表す指標群（Well-being ダッシュボード²⁷⁾」（以下「ダッシュボード」という。）として示している²⁸⁾。

ダッシュボードの構造は、次ページ体系図のとおりである。まず第1層に、全体的な生活満足度（総合主観満足度）を位置付けている。第2層に、「家計と資産」「健康状態」といった11の分野別満足度を位置付けている。11分野の選定に際しては、OECD の「より良い暮らし指標」の分野をベースに、「全体的な生活満足度」と「分野別満足度」の関係を統計的に分析した上で設定している²⁹⁾。そして、第3層に、分野別満足度との統計的な関係を分析した上で設定した客観指標群を分野別に位置付けている³⁰⁾。

この構造設定により、総合的な生活満足度や各分野別満足度は、経済指標等の客観指標と突き合わせられるようになっており、分野別満足度と生活満足度との関係や、分野ごと、あるいは総合的な生活満足度についての客観指標（群）との対応関係も分析できる。PDCA の観点からも、客観指標は、生活満足度の改善という最終目標に対する中間的な指標の役割を果たしうる。

加えて、都道府県や地域別での集計が可能であり、地域間比較が可能なように、人口の少ない都道府県では人口比で多めのサンプルを確保している³¹⁾。こうしたバランスにより、性別や年齢階層別などの属性に照らして様々な比較検討に生かされることが期待される。また、匿名化処理を施したアンケート回収データを公開しており³²⁾、簡易な手続で研究者や政策企画立案者が個票データを用いた統計的な分析

²⁷⁾ 「ダッシュボード」の原義は自動車などの「計器盤」である。自動車のように状態に関連する指標を集め、その全体像の一覧表示を行う仕組みのことを意味している。

²⁸⁾ 現行のダッシュボードの検討については、内閣府（2020b）の第2章を参照。

²⁹⁾ 内閣府の調査では、OECD の10領域（主観的 Well-being を除く）に加え、「子育てのしやすさ」、「介護のしやすさ・されやすさ」、「生活の楽しさ・面白さ」の3つを加えた13の分野別主観満足度を調査。このうち、11分野をダッシュボードとして採用。「政治、行政、裁判所への信頼性」については、過去研究により生活満足度への説明能力が低いことが確認されたため、また、「生活の楽しさ・面白さ」については他の分野別満足度との関係性が高く、客観的指標の選定が困難ということなどがあり、この2つの分野別満足度はダッシュボードの第2層からは除外している。

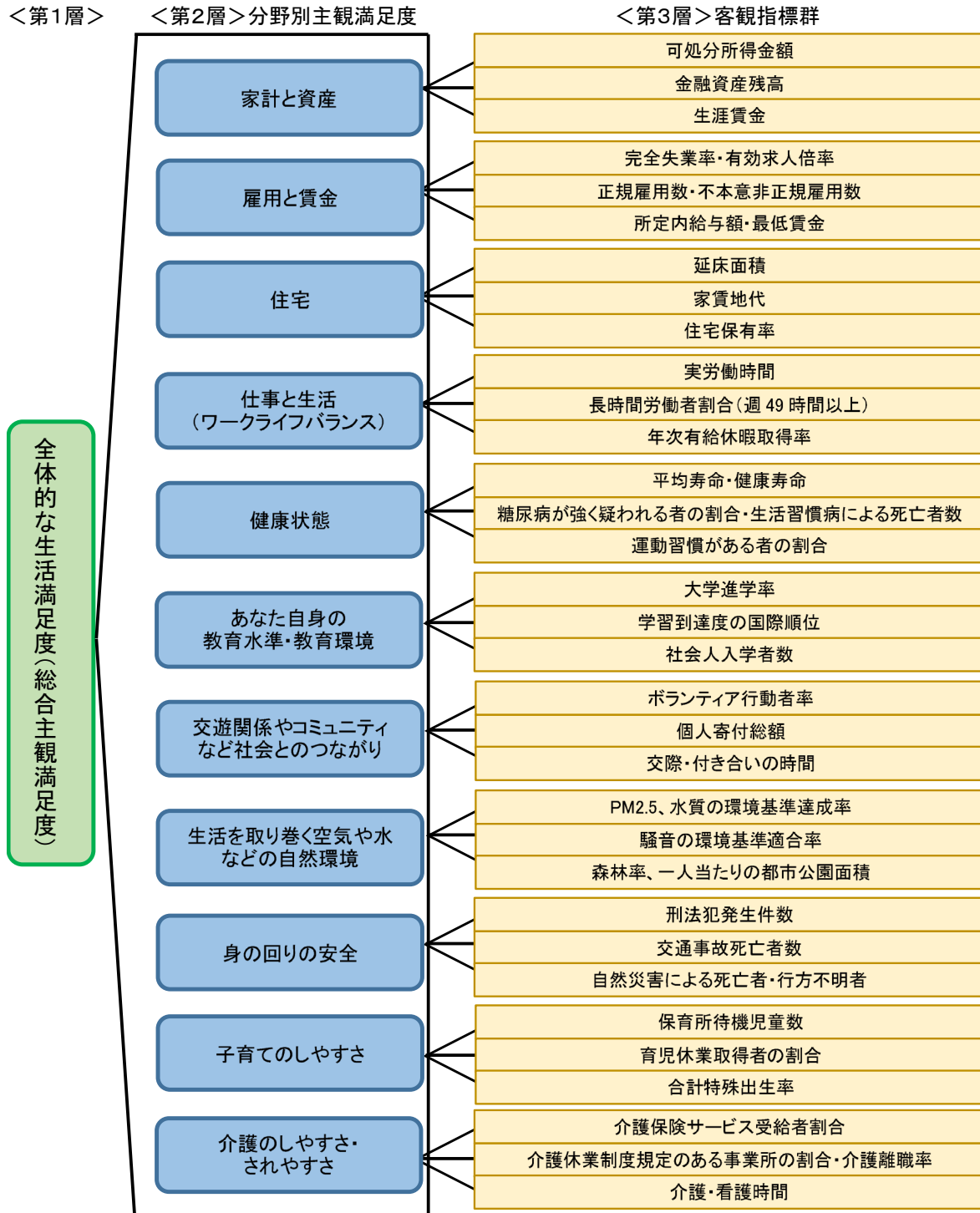
³⁰⁾ 客観指標群については、分野別満足度との相関関係が確認できたものを中心に設定されているが、満足度調査で重要との指摘が多かった項目に関連する指標等も一部含まれているため、一定の留意が必要である。詳細については、内閣府（2020b）の第1章を参照。

³¹⁾ サンプルの割当にあたっては、母集団をできるだけ反映するとともに、都道府県別結果の標準誤差を小さく抑えるよう、均等割当と人口比に応じた割当を組み合わせている。詳細については内閣府（2020a）の参考資料「④モニターの割当方法」参照。

³²⁾ 内閣府ウェブサイト（<https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/manzoku/index.html>）から申請が可能。また、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター（SSJDA）にも寄託（2025年7月現在）。

に利用できるようにしている。なお、公開データには、これまでの調査の回答者が含まれていることから、一部をパネルデータとして利用することも可能である。

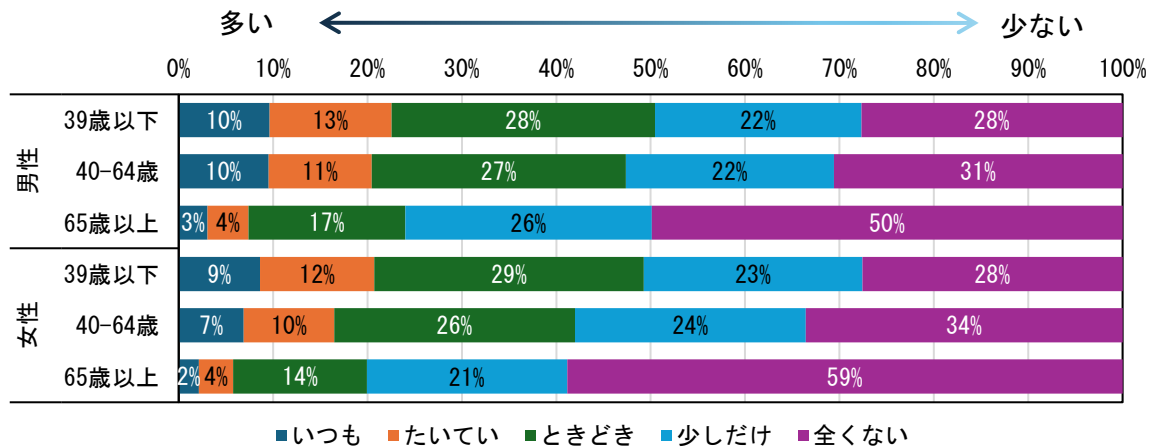
ダッシュボードの体系図



4. 社会とのつながりに関する追加分析

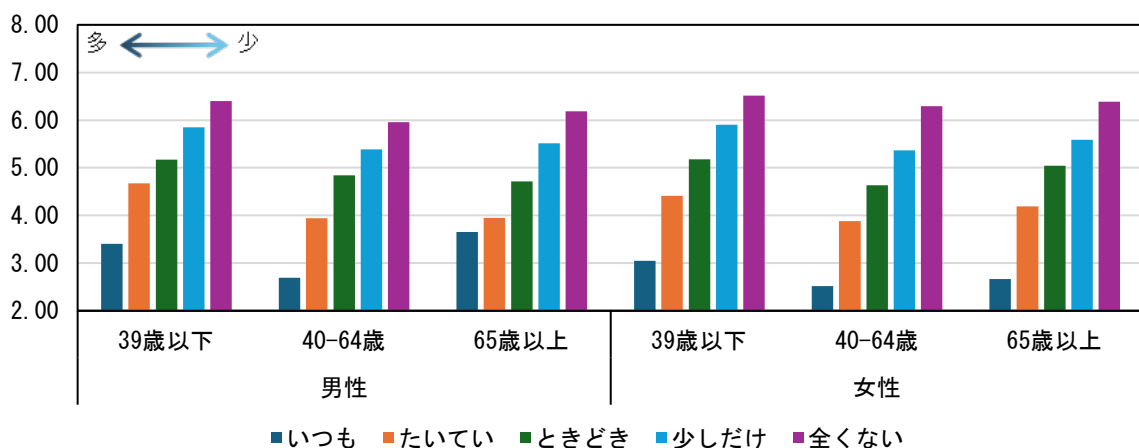
「自分は孤独であると感じる」の頻度について確認すると、若年層とミドル層が比較的多い。

図表４－７（再掲） 「自分は孤独であると感じる」頻度
（男女、年齢階層別）



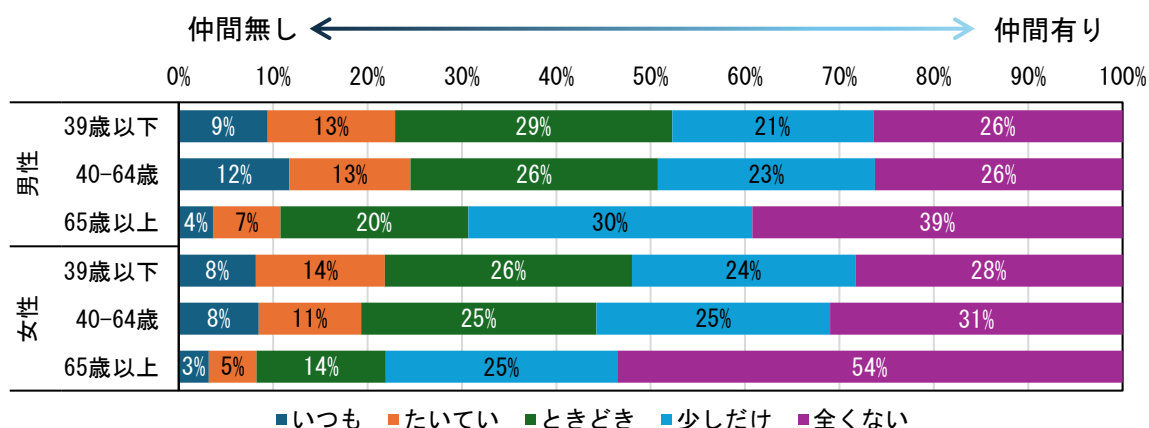
「自分は孤独であると感じる」の頻度が低いと、社会とのつながり満足度が高い。

参考図１ 「自分は孤独であると感じる」頻度と社会とのつながり満足度
（男女・年齢階層別）



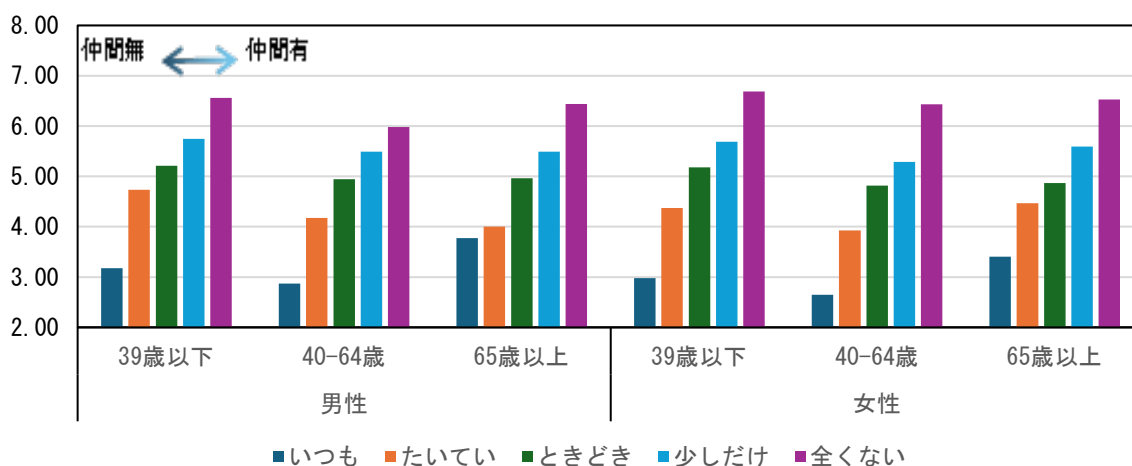
「一緒に楽しめる仲間がいないと感じる」の設問について確認する。男女、年齢階層別にみると、こちらも若年層とミドル層の頻度が高い。

図表４－８（再掲） 「一緒に楽しめる仲間がいないと感じる」の回答割合（男女、年齢階層別）



「一緒に楽しめる仲間がいないと感じる」の項目の頻度が低い方が、社会とのつながり満足度が高い。

参考図２ 「一緒に楽しめる仲間がいないと感じる」の回答と社会とのつながり満足度（男女・年齢階層別）



参考文献

- Margolis, S., Schwitzgebel, E., Ozer, D. J., & Lyubomirsky, S. (2021). Empirical Relationships Among Five Types of Well-being. In M. T. Lee, L. D. Kubzansky, & T. J. VanderWeele (Eds.), *Measuring Well-Being* (pp. 377-403). Oxford: Oxford University Press.
- OECD. (2013). *OECD Guidelines on Measuring Subjective Well-being*. Paris: OECD Publishing.
- 横山直, 有野芹菜, 門野愛. (2024). Well-being "beyond GDP"を巡る国際的な議論の動向と日本の取組. ESRI Research Note No.82.
- 河野陽介, 西原照雅. (2025). 主観的 well-being の多面的評価と規定要因の解明－主観的 well-being の政策活用に向けて－. ESRI Research Note No.90.
- 株式会社 電通. (2024 年 9 月 9 日). 電通、第 18 回「ウェルネス 1 万人調査」を実施. 参照日: 2025 年 9 月 25 日, 参照先: 電通 ウェブサイト: <https://www.dentsu.co.jp/news/release/2024/0909-010773.html>
- 橋本成仁, 今村陽子, 海野遥香, 堀裕典. (2021). サードプレイスと主観的幸福感に関する研究. 土木学会論文集 D3 (土木計画学), 77(5), I_375-I_383.
- 独立行政法人労働政策研究・研修機構. (2023). JILPT 個人パネル調査「仕事と生活、健康に関する調査」第 1 回. JILPT 調査シリーズ No.234.
- 内閣府 政策統括官 (経済社会システム担当). (2020a). 「満足度・生活の質に関する調査」に関する第 3 次調査報告書.
- 内閣府 政策統括官 (経済社会システム担当). (2020b). 「満足度・生活の質に関する調査」に関する第 4 次調査報告書.
- 内閣府 政策統括官 (経済社会システム担当). (2024). 満足度・生活の質に関する調査報告書 2024.

内閣府において、本調査の設計及び報告書のとりまとめを実施するにあたり、下記の有識者の方々のご協力を得た。

猪狩 廣美	聖学院大学政治経済学部特任教授、荒川区自治総合研究所理事
大守 隆	元大阪大学経済学部 教授
小塩 隆士	一橋大学経済研究所 特任教授
亀坂 安紀子	青山学院大学 経営学部 教授
土屋 隆裕	横浜市立大学 データサイエンス学部 教授

(50 音順、敬称略)

(事務局・報告書執筆)

政策統括官（経済社会システム担当）付参事官（総括担当）

小堀 厚司

政策統括官（経済社会システム担当）付参事官（総括担当） 付

石田 将康、岩川 喜輝、上野 由加里、川崎 七海、木村 拓真、檀上 賢、野村 彰宏

(50 音順)